

益城町文化財報告 第8集

益城町の中世山岳寺院

じょうらくじ ふくでんじ あんようじ
(常楽寺・福田寺・安養寺)

1985

熊本県 益城町教育委員会

序 文

益城町は熊本平野の東端に位置し、有史以前より地味豊かで先人の住み易い場所でありました。この自然環境を背景として飯田山常楽寺と尾峰山福田寺は、中世山岳仏教の中心的存在として経営されたと考えられます。しかしすでに数世紀を経た現在、その遺構は多く叢中に没し、かつての繁栄をしのばせるものはありません。半面益城町は熊本空港を始め、テクノポリスの建設と開発が進み、かつての静寂な山中にも、開発が着手される事が予想されるため、今後文部省より3ヶ年の補助事業の認可をうけ、両寺跡の調査を実施しました。両寺院の学術調査は今回が最初であるので、今までの不明の分にもいくらかは解明の光があたったと考えられます。ここに報告書を刊行し、大方の研究の一助ともなれば幸いです。

昭和61年3月

益城町教育委員会 教育長 **安田 國司**

例 言

1. 本書は文化庁の補助を受け、昭和58年より三ヵ年計画で益城町が実施した「遺跡詳細分布調査」(益城町の中世山岳寺院)の報告書である。

2. 調査は昭和58年度に飯田山常楽寺を、59年度には常楽寺及び尾峰山福田寺、大楠山安養寺を、60年にはこれらの補足調査及び整理報告書の執筆をした。

3. 報告書の執筆分担は次のとおりである。

一 序 章

(一) 調査に至るまで

松野國策(益城町文化室長)

二 飯田山常楽寺の調査

(一) 常楽寺の石塔群とその他の遺物

島津義昭(熊本県文化課学芸員)

三 尾峰山福田寺の調査

(一) 福田寺の石塔群とその他の遺物

高木正文(熊本県文化課学芸員)

その他の章節については緒方勉が執筆した。

また、これら寺院に関する文献について熊本大学教授森山恒雄氏の手を煩わし、民俗調査については同大学助教授安田宗生氏に依頼した。

4. 現地調査にあたり安達武敏、作本巖、福永泰、山本光晃等の各氏の協力を得、また安達氏には整理についても協力してもらった。

5. 現地の写真については、永田昭一氏及び緒方があたり、常楽寺の本尊、安養寺旧蔵の薬師三尊については大倉隆二氏の提供を受けた。

6. 本書の編集は緒方が担当した。

本文目次

一 序 章	1
(一) 常楽寺及び福田寺の位置	1
(二) 調査に至るまで	1
二 飯田山常楽寺の調査	3
(一) 寺院とその他の遺構	3
1. 常楽寺の現状	3
2. 常楽寺周辺(村跡)	4
3. その他(下の山の板碑・田口弾正墓)	9
(二) 常楽寺石塔群とその他の遺物	13
(三) 常楽寺調査のまとめ	19
三 尾峰山福田寺跡の調査	21
(一) 福田寺跡調査の概要	21
1. 寺屋敷	21
2. 鐘撞堂周辺	26
3. 坊主墓と片平山	26
4. 鬼の窟周辺	31
5. 一の香	32
6. その他「虎が塔」など	33
(二) 福田寺の石塔群とその他の遺物	39
(三) 福田寺跡調査のまとめ	65
四 大楠山安養寺跡の調査	65
(一) 寺屋敷周辺	67
(二) 安養寺周辺の関連資料	71
1. 左の目八幡宮とその周辺	71
2. 安養寺の鬼瓦	72
3. 現存する安養寺所伝の仏像	72
(三) 安養寺跡調査のまとめ	74
付1. 飯田の民俗	安田宗生 76
付2. 益城町の中世山岳寺院関係文献史料	森山恒雄 96

挿 図 目 次

第1図	常楽寺及び福田寺・安養寺位置図	2
第2図	常楽寺とその周辺	5
第3図	旧飯田村地割(略図)	6
第4図	飯田山常楽寺全体図	7・8
第5図	常楽寺墓地周辺	10
第6図	飯田山常楽寺境内実測図	11・12
第7図	宝篋印塔・五輪塔実測図	15
第8図	層塔実測図	16
第9図	常楽寺周辺の遺物	17
第10図	常楽寺周辺の石塔銘文	18
第11図	福田寺と安養寺跡周辺図	21
第12図	寺屋敷・鐘撞堂及び大門跡	24
第13図	坊主墓の石塔	25
第14図	片平山の石塔	27
第15図	鬼ノ窟周辺	29
第16図	鬼の窟	30
第17図	一の香1における石塔分布	31
第18図	一の香2における石塔分布	33
第19図	福田寺の石塔群(寺屋敷1)	38
第20図	福田寺の石塔群(寺屋敷2)	39
第21図	福田寺の石塔群(鐘撞堂跡1)	43
第22図	福田寺の石塔群(鐘撞堂跡2)	44
第23図	福田寺の石塔群(鐘撞堂跡3)	45
第24図	福田寺の石塔群(坊主墓1)	46
第25図	福田寺の石塔群(坊主墓2)	47
第26図	福田寺の石塔群(坊主墓3)	48
第27図	福田寺の石塔群(坊主墓4)	49
第28図	福田寺の石塔群(坊主墓5)	50
第29図	福田寺の石塔群(片平山)	52
第30図	福田寺の石塔群(片平山東麓に転落したもの)	53
第31図	福田寺(虎が塔)	55
第32図	福田寺(虎が塔銘文拓本)	56
第33図	福田寺(岩崎家石塔)	57
第34図	福田寺(岩崎家五輪塔銘文拓本)	58
第35図	福田寺のその他の遺物(鐘撞堂跡)1	60
第36図	福田寺のその他の遺物(鐘撞堂跡)2	61
第37図	福田寺のその他の遺物(鐘撞堂跡)3	62
第38図	安養寺跡地形図	66
第39図	板碑実測図1(天文廿二年碑)	68
第40図	板碑実測図2(永禄十年碑)	69
第41図	板碑拓本(天文廿二年碑部分)	70

目次

第1表	常楽寺境内石造物一覧表	14
第2表	寺屋敷の石塔群一覧表	39~40
第3表	鐘撞堂跡の石塔群一覧表	40~42
第4表	坊主墓の石塔群一覧表	47・48・50・51
第5表	片平山の石塔群一覧表	51・53
第6表	片平山東麓に転落した石塔群一覧表	54
第7表	虎が塔一覧表	54
第8表	岩崎家石塔一覧表	59

図版目次

図版 1	飯田山遠望	1
図版 2	一町地藏 1	2
図版 3	一町地藏 2	3
図版 4	一町地藏 3	4
図版 5	一町地藏その他	5
図版 6	常楽寺境内	6
図版 7	常楽寺の石塔	7
図版 8	常楽寺の仏像 1	8
図版 9	常楽寺の仏像 2	9
図版 10	常楽寺墓地	10
図版 11	飯村家墓地の石塔	11
図版 12	板碑と田口弾正墓	12
図版 13	つづの山遺跡と「重福寺阿弥陀石」	13
図版 14	福田寺の麓集落・内寺	14
図版 15	朝来山（上宮）遠望	15
図版 16	一の香 1 の石塔群	16
図版 17	坊主墓の石塔群	17
図版 18	寺屋敷、鐘撞堂及び片平山周辺	18
図版 19	福田寺を離れた石塔	19
図版 20	福田寺周辺「三竹ようご石」	20
図版 21	鬼ノ窟及び一の香 2	21
図版 22	安養寺寺屋敷の現況	22
図版 23	石塔と鳥居篇額	23
図版 24	「大楠山」と陽刻した瓦	24
図版 25	安養寺を去ったほとけ達 1	25
図版 26	安養寺を去ったほとけ達 2	26

三 尾峰山福田寺跡の調査 (第11図)

(一) 福田寺跡調査の概要

福田寺は益城町の大字福原字福田寺に寺跡を残す山岳寺院で、『肥後國誌』に「福田寺迹二作福傳 台宗ノ古迹ト云山號開基等不分明樹下草底ニ古墳石散在ス今此林ノ篠ヲ剪テ矢塵トス 附録云今ヤ鎮守堂ノミ廢迹ニ残レリ」と記された。言うなれば寺跡のみを残す幻の寺である。その後、『上益城郡史』及び『熊本縣史蹟調査報告』の中に角田政治氏等による踏査の記録が残されている。

その後、戦前及び戦後にかけて地元の作本巖老(明治37年生)の案内で、熊本大学松本雅明教授らが現地を踏査しているが、これまでほとんど組織的な調査はなされていない。昭和52年に永田日出男氏が訪れ、自らの踏査で得た資料をもとに「福田寺覚書注1」として記録にとどめている。

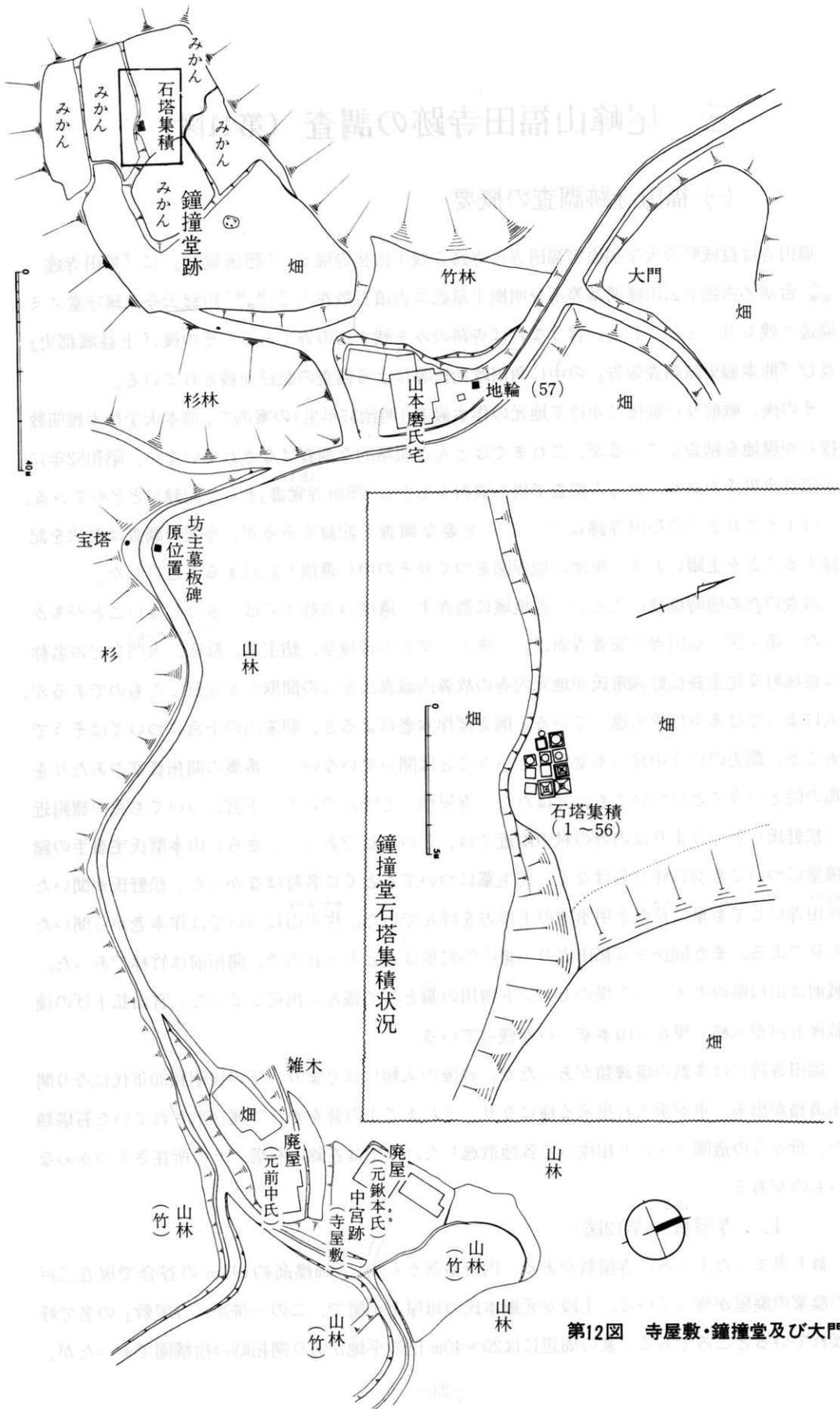
以上がこれまでの福田寺跡についての主要な調査と記録であるが、今回の調査は現状を記録することを主眼におき、現地の地形図をつくりその中に遺構を記録することにした。

調査のため随時現地に入るが、各地域に散在する遺構の名称すらはっきりしないことが多かった。第・図「福田寺と安養寺周辺」の第1～第3の鐘撞堂、坊主墓だどこ、駄床だいもん、大門などの名称は益城町文化室長松野國策氏が地元内寺の故森内誠喜氏からの聞き取りを記録したものであるが、人によっては多少伝承も違っている。例えば作本老によると、朝来山の上宮についてはそうであるが、郡史のいう中宮(本堂跡)ということは聞いていない。一番奥の開拓農家のあたりを奥の院ということについても、元はただ「寺屋敷」と呼んでいた。下宮についても鬼の窟附近(松野氏)というよりは内寺の村の附近では、という話であった。さらに山本磨氏宅裏手の鐘撞堂についても別に呼び名はなく、坊主墓についてもとくに名称はなかった。松野氏が聞いた花田寺はなでんにしても単に花殿はなでんと用水池の下の方を呼んでいた。片平山かたへらやまについては作本老から聞いた名称である。また同氏から福田寺の一带の25町歩はもともと官山で、開拓前は竹林であった。戦前は山口県のセメント工場のセメント樽用のたが箍として盛んに出荷していた。官山払下げの後戦後五戸が入植、現在は山本家一戸が残っている。

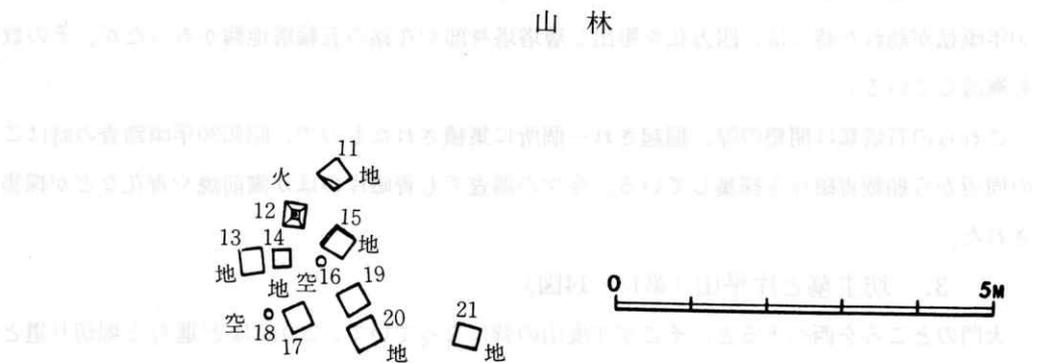
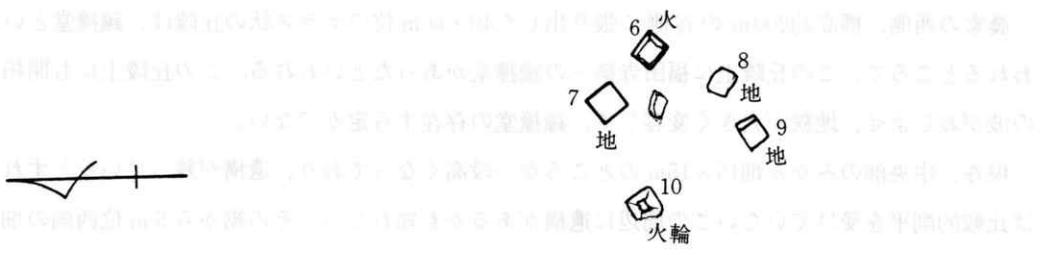
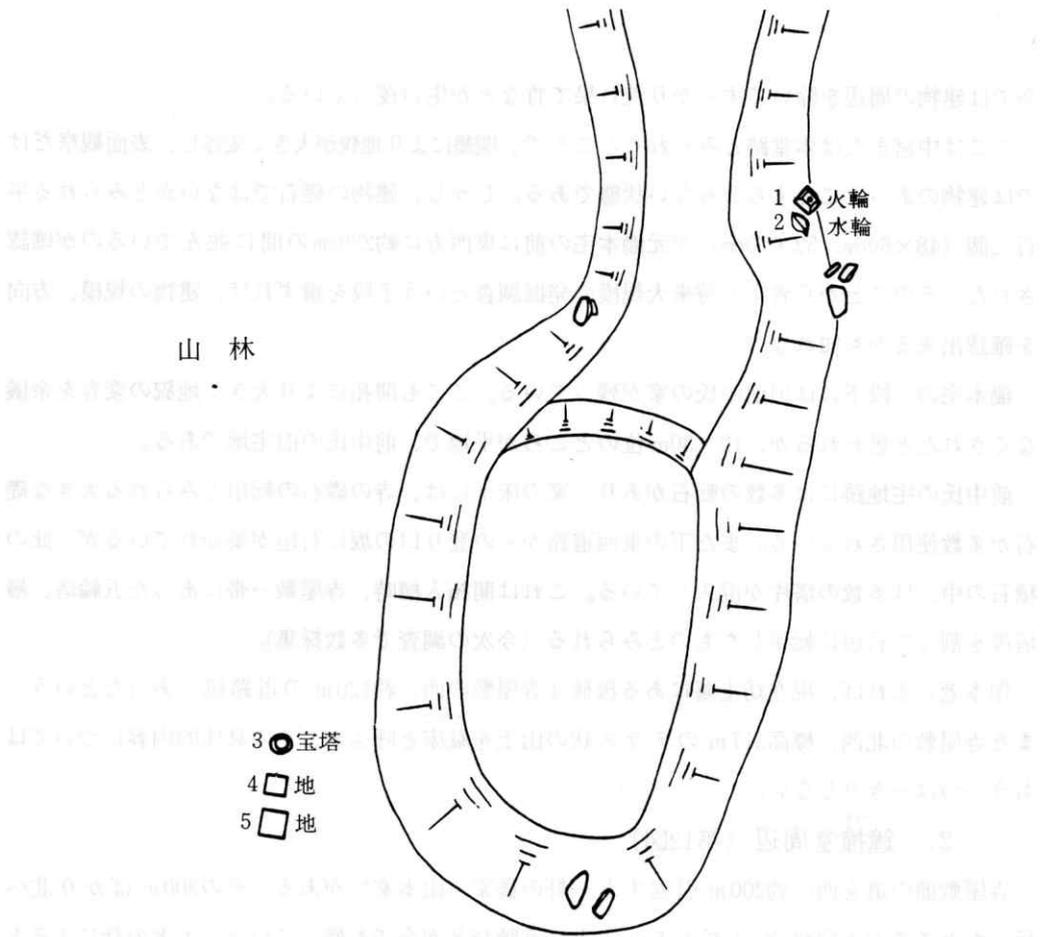
福田寺跡には多数の塔碑類があったが、戦後の入植にはじまり、その後昭和30年代になり開拓道路が出来、車が乗入れ出来る様になり、それまで牛の背をかって運び出されていた石塔類が、折からの造園ブームと相俟って各地散逸した。今では在銘の石塔でその所在さえつかめな
いものがある。

1. 寺屋敷注2 (第12図)

最も奥まったところに寺屋敷がある。内寺集落から約1.5km標高約193mの谷合で現在二戸の農家の廃屋が残っている。上段が元鋤本氏の母屋と小屋で、この一帯が「寺屋敷」の名で呼ばれているところである。家の周辺には20×40m位の平地があり開拓時の柑橘園であったが、



第12図 寺屋敷・鐘撞堂及び大門跡



第14図 片平山の石塔

今では建物の周辺を除いてすっかり荒れ果て竹などが生い茂っている。

ここは中宮または本堂跡とみられるところで、開墾により地貌が大きく変容し、表面観察だけでは建物のあったことすら分らない状態である。しかし、建物の礎石ではないかとみられる平石二個（48×60cm、52×70cm）が元鋤本宅の前に東西方に約220cmの間に並んでいるのが確認された。そのことから考えて将来大規模の発掘調査という手段を講ずれば、建物の規模、方向を確認出来るかも知れない。

鋤本宅の一段下には旧前中氏の家が残っている。ここも開拓により大きく地貌の変容を余儀なくされたと思われるが、10×30m位のところが平地で、前中氏の旧宅地である。

前中氏の宅地跡には多数の転石があり、家の床下には、寺の礎石の転用とみられる大きな礎石が多数使用されている。また下の東西道路からの登り口の坂に石垣が築かれているが、此の積石の中には多数の塔片が混入している。これは開拓入植時、寺屋敷一带にあった五輪塔、層塔等を割って石垣に転用したものとみられる（今次の調査で多数採集）。

作本老によれば、現在坊主墓にある板碑は寺屋敷の西、約120mの道路脇にあったという。また寺屋敷の北西、標高217mのテラス状の山上を駄床と呼ぶが、その具体的内容についてはもう一つはっきりしない。

2. 鐘撞堂^{つき}周辺（第12図）

寺屋敷前の道を西へ約200m引返すと一軒の農家（山本家）がある。その300mばかり北へ行ったところが大門跡で、「ダイモン」という呼び名が今でも残っている。古老の話によると道をはさんで門柱があったということである。

農家の西側、標高約200mの谷側に張り出した40×60m位のテラス状の丘陵は、鐘撞堂といわれるところで、この丘陵上に福田寺第三の鐘撞堂があったといわれる。この丘陵上にも開拓の波がおしよせ、地貌が大きく変容して、鐘撞堂の存在すら定かでない。

現在、中央部のみかん畑15×15mのところ有一段高くなっており、遺構が残っているとすれば比較的削平を受けていないこの周辺に遺構があるかも知れない。その裾から5m位西側の畑の隅には多数の石塔残欠が集積されている。現在残っている石塔の数は少なくなったが、昭和30年頃私が訪れた時には、四方仏を彫出し層塔塔身部や在銘の五輪塔地輪があったが、その数も漸減している。

これらの石塔類は開墾の際、掘起され一個所に集積されたもので、昭和30年頃踏査の時はこの周辺から舶載青磁片を採集している。今次の調査でも青磁片のほか備前焼や青花などが採集された。

3. 坊主墓と片平山（第13・14図）

大門のところを西へ下ると、そこが丁度山の背になっていて、200mほど進むと堀切り道となる。この堀切り道は昭和30年代に出来た新道で、元の道は坂を登るあたりから北の谷間へと

下っていた。この堀切り道を挟んだ南側の山が坊主墓で、反対側の山が片平山である。

坊主墓は標高172m余のなだらかな山にあって、山頂附近に三基の板碑と多数の五輪塔がある。またこの山域には石塔が多数散乱しており、確認出来たものは第・図に地点をおとした。

板碑は石で基壇を設け、西を向き三基が並んでいるが、このうち北側の二基は作本巖氏の証言によると、寺屋敷への道端にあったのをここへ移転したものである。このほか板碑の前面の東西20m 南6mの範囲に石塔が多数散乱しており、地輪7、水輪6、火輪6、空風輪3の五輪塔のほか、宝塔塔身1が確認された。この中には元亨2年と推定される五輪塔の破片が含まれている。

坊主墓のある山の道路を挟んで反対側の山を地元ではカタヘラヤマと呼んでいる。この山の山頂附近は平らになっていて、その周辺には多数の石塔片が散乱している。その分布の状況は第・図に示したとおりで、確認されたものは宝塔塔身1、五輪塔のうち地輪13、水輪1、火輪4、空風輪2があり、この一帯山林には多数埋没しているものとみられる。作本老の話によると坊主墓のある山の南東の竹林には在銘の五輪塔があったが、今では行先不明。

片平山の横を旧道を下たところは花田の呼び名が残っているが、その由来については定かでない。また先年、片平山の東側山麓の旧道横の用水池をさらえたところ、中から多数の五輪塔が発見された。遺物は現在道路脇に水輪4、火輪1が転がっている。またこれらの五輪塔の中には道路脇という好条件が禍いして持去られたものが少なくないという。(作本氏談)

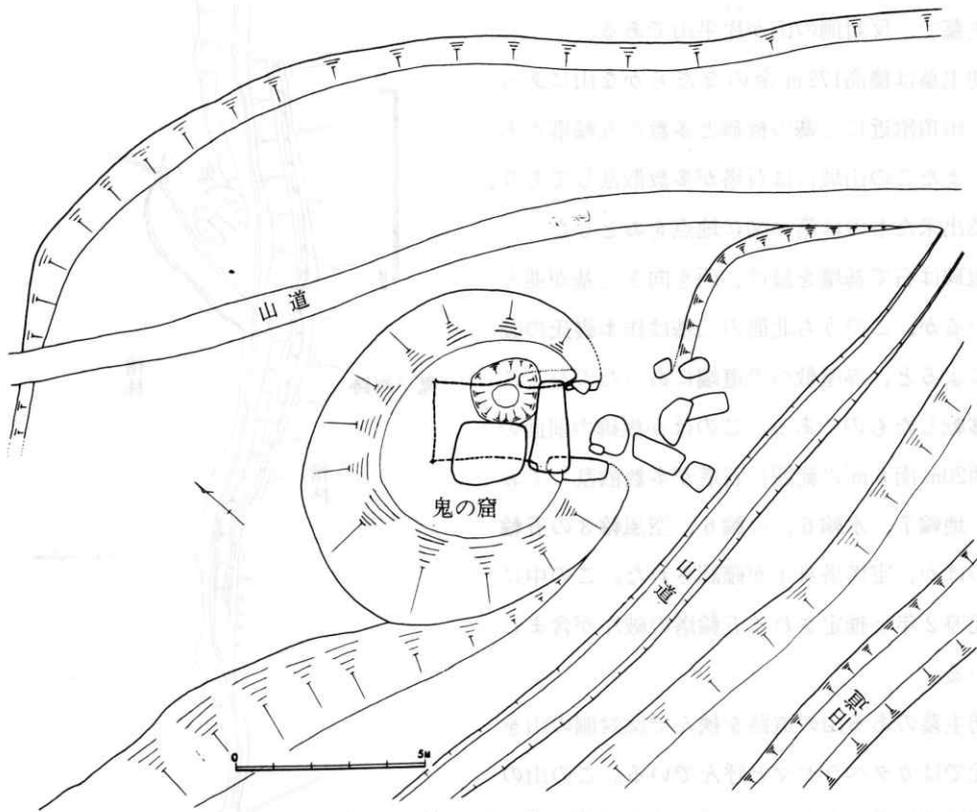
これらの五輪塔は恐らく、片平山の山頂から悪戯遊びに転がされたものとみられる。これと同趣のことが、鐘撞堂(第3)のところでも開墾の際谷に向けて転がしたということを目にした。

4. 鬼の窟周辺(第15図)

鬼の窟は内寺の集落から開拓道路の坂道を山頂へ向けて500mばかり登ると視界が開け、や



第15図 鬼ノ窟周辺



第16図 鬼の窟

がてなだらかな山道に変る。その大きく屈曲するあたりから小径を100mほど谷の方に向けて下ると、右手に^{注3}鬼の窟がある。ここには直径10m位の下に石室があり、入口を東南にむけて開口している。石室は幅約180cm奥行4m位で横穴式古墳とみられる。天井は陥没、前庭部に石材が多数散乱している。なお石室内には仏像（頭部欠失）一体が落石とともに残っており、これを福田寺と関連づければ、行者の隠り場として使われた可能性もあろう。また鬼の窟のすぐ前（東南）には鬼の樹があったが、今では持去られている。

この鬼の窟周辺は植林され、昼なお暗い有様である。この一帯が「下宮」の呼び名を残しており、また鬼の窟の上方に、福田寺第二の鐘撞堂^{注4}があったといわれている。第一の鐘撞堂は赤井川を挟んで対岸の丘の上にあったといわれ、非常の際は鐘撞堂から次の鐘撞堂へ、つぎ次と合図の早鐘が伝送されたとも言い伝えられている。

5. 一の香^{いちこう}（第17・18図）

内寺集落の下方、赤井川の左岸に「一の香^{いちこう}」というところが、そこに多数の石塔類があることを知り、地元の作本老の案内で現状を調査した。

現地は内寺橋より田の畦沿いに約150m下ったところの左岸の一帯で、標高50～55m位の丘

陵裾部にあたる。またここらは、南北両側の丘陵が川に向かって迫っているところで、内寺集落はその内側の袋状のところに点在している。

ここでも現状を把握するため、石塔の散乱状況を平面図におさめることにした。まず手始めに川よりの地点、青木実氏所有地周辺から測量をはじめた。この地点を便宜的に一の香1（附図3）として取扱った。その後、ここの測量過程に地元の某氏があらわれ、自分の耕作地にも同種の石塔多数散乱している事実を知らされ、踏査の結果平面図を作成することにした。ここの測量図は一の香2として処理した。

一の香1（第17図）

この地点の石塔類の散乱地は赤井川にほど近く、水田二枚を距てて20m 足らずのところである。水田の上方には幅約1mの農道がある。道の南は石垣が築かれ、その上方には東西約30m 南北約10mの狭い範囲に自然石に混った多数の石塔が混在している。その中には五輪塔の地輪あり水輪あり、また層塔相輪と見られるものなど大小雑多で、測量図に取上げたものでも100に近い数に達する。石塔類が集積する附近は荒地で、石塔を含む石材が石墨状に構築されている。この状況は近代の開墾により廃棄集積されたことでないことは、地元の作本老の「子供の頃から変っていない。」という話から明らかである。

一の香1の石塔は、道路の便が悪いところから造園ブームの難を退れたものとみられ、その数はともかく、埋没石塔の中には一片五〇cmに達する大形の地輪もあり、この中には紀年銘をもつものの存在が予想される。

一の香2（第18図）

一の香2は一の香1の上方70mばかりの地点で、密柑畑の周辺に散乱し、埋没しているのも多数あるということである。確認したものは地輪7、水輪5、火輪7、空風輪3があり中には梵字が彫られたものもある。

6. その他「虎が塔」など（第11・31図）

一の香の対岸、町道福原袴野線の下通称松久保井手の附近に「虎が塔」（一名虎御前の塔）という大形の五輪塔が存在していたことは多くの人が証言するところで、それが現在、西原村宮山の元山本医院の庭にあることも人の知るところである。これについて、^{注5}「福田村郷土誌」（大正四年発行）の記するところ

虎が塔 栢窪ヨリ川内田に通スル路下ニアリ。昔天笠ノ阿育大王世界中ニ一千基ヲ建ツ。依ッテ大磯ノ虎御前曾我兄弟ノ菩提ヲ弔フ為メ之ニ擬シテ日本國中ニ五百基ヲ建ツ。之レ其ノ一ナリ。曾我氏夜討後七十餘年。「門人白衣立之」トアリ。塔ノ形状寸法左ノ如シ。以下略図を描き各部位の計測値を記し種字についてもふれている。

この虎が塔は、約30年前西原村宮山の山本宅への移転売却の経緯について当時の模様を作本老は次のように語った。

この五輪塔はもともと川内田へ通ずる県道より水田への下り坂左手にあった。その水田は福原の故小原亀吉氏の所有で、それを松本信氏が購入。松本氏は水田の降り口で農具等の上げおろしに不便ということで山本医師に売却したという。内寺の村人達はその解体作業を見て事の重大さを知り、急拠町の社会教育課の河辺氏に善処を求めた。結果として、個人の所有だから仕方がないという返事しかもらえなかった。

その後、町の文化財保護委員であった作本巖氏は他の委員ともはかり直接山本医院に出かけ、再三にわたって買戻しに努力したが不首尾に終わっている。

虎が塔跡より県道を少し下ると、北へ脇道がのびる。それは安養寺へ通じる枝道であるが、150mばかり入った三叉路に源志山げんじやまの板碑がある。大永6年の紀年銘がある。また県道を少し下ると福原集落であるが、修理屋敷という屋号をもち修理昭夫氏の庭には、福田寺よりきたといわれる石塔がある。地輪1、水輪3、火輪1のほかには層塔の反り蓮弁のついた相輪とみられるもの一つがある。

注1 永田日出男「福田寺跡覚書」『石人』18巻6月号 昭和52年。これは「福田寺跡覚書(三)(四)」と続き同誌に掲載。

注2 「寺屋敷」については、角田政治「福田寺跡」『熊本県史蹟調査報告』に記載があり、現在もその呼び名が残っているのでそのまま使用した。

注3 「鬼の窟」については、新編事蹟通考、肥後見聞雑記、福田村郷土誌では肥後風土記逸文の朝来名峯との関連で取上げられている。

注4 鐘撞堂についての伝聞は、益城町文化室長松野國策氏採録。

注5 「虎が塔」については、上益城郡史福田村郷土誌に記載があるが永田日出男氏も「文永塔」として追跡調査されている。

(二) 福田寺の石塔群とその他の遺物

1. 福田寺の石塔群

福田寺の石塔の一部については、紹介されたことがあったが、その全体について明らかにされたことはなかったと思う。そこでここでは、崩れかけているものも含めて石塔すべてを実測し、美術的見地からのみでなく、歴史的考察の資料として提示することに務めた。しかし、時間的な制約もあり、山麓の一の香にある石塔群には調査が及ばなかった。

調査した石塔は、寺屋敷、鐘撞堂跡、坊主墓、片平山にあるものと、移動されている虎が塔、岩崎家石塔である。石塔は殆んど部品がころがっていたり、部品を積み直したものであるが、ここでは私見を入れず現状の積み方のまま示し、研究者が再調査される際、個々の石塔を確認しやすいようにした。なお、先に示してある測量図中の石塔の番号は、個々の石塔実測図の番号と一致するようにした。

福田寺の石塔のうち年号の確認できたものを古い順に示すと次のようになる。

- ① 弘長2年(1262) 5月19日 坊主墓の五輪塔地輪
- ② 文永8年(1271) 8月2日 虎が塔の五輪塔地輪
- ③ 永仁5年(1297) 3月彼岸 岩崎家の五輪塔地輪
- ④ 嘉暦2年(1327) 5月9日 鐘撞堂跡の五輪塔地輪
- ⑤ 寛正3年(1462) 4月5日 鐘撞堂跡の五輪塔地輪
- ⑥ 大永6年(1526) 9月好日 坊主墓の板碑
- ⑦ 永禄7年(1564) 11月8日 坊主墓の板碑

このうち、鎌倉時代の弘長2年、文永8年、永仁5年銘の五輪塔は、県内でも古い時期に属する遺品として注目すべきものである。

(1) 寺屋敷の石塔群

層塔と笠塔婆が確認された。

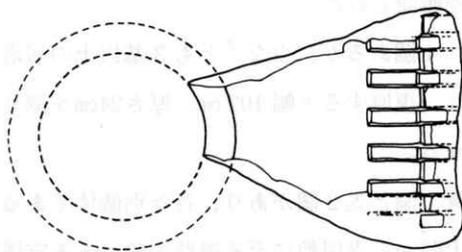
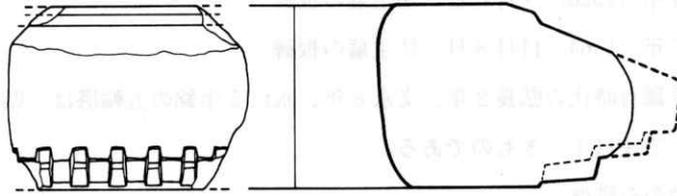
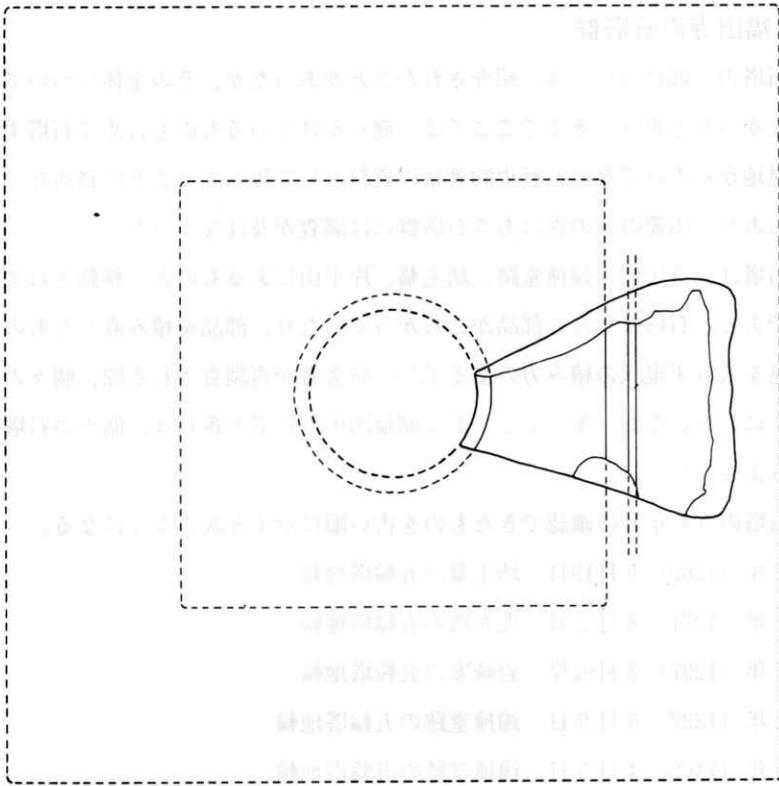
層塔の部品は、4個あるが、少なくとも3基以上の層塔があったと考えられる。特に1個(第19図)の笠は、復原すると幅102cm、厚さ24cmを測り、県内でも最大級の層塔が造立されていたことがわかる。

笠塔婆は、塔身1個と笠2個があり、各々別個体であると考えられる。

第20図8は、大門から寺屋敷に至る道路の脇にある宝塔の塔身である。なお、坊主墓にある



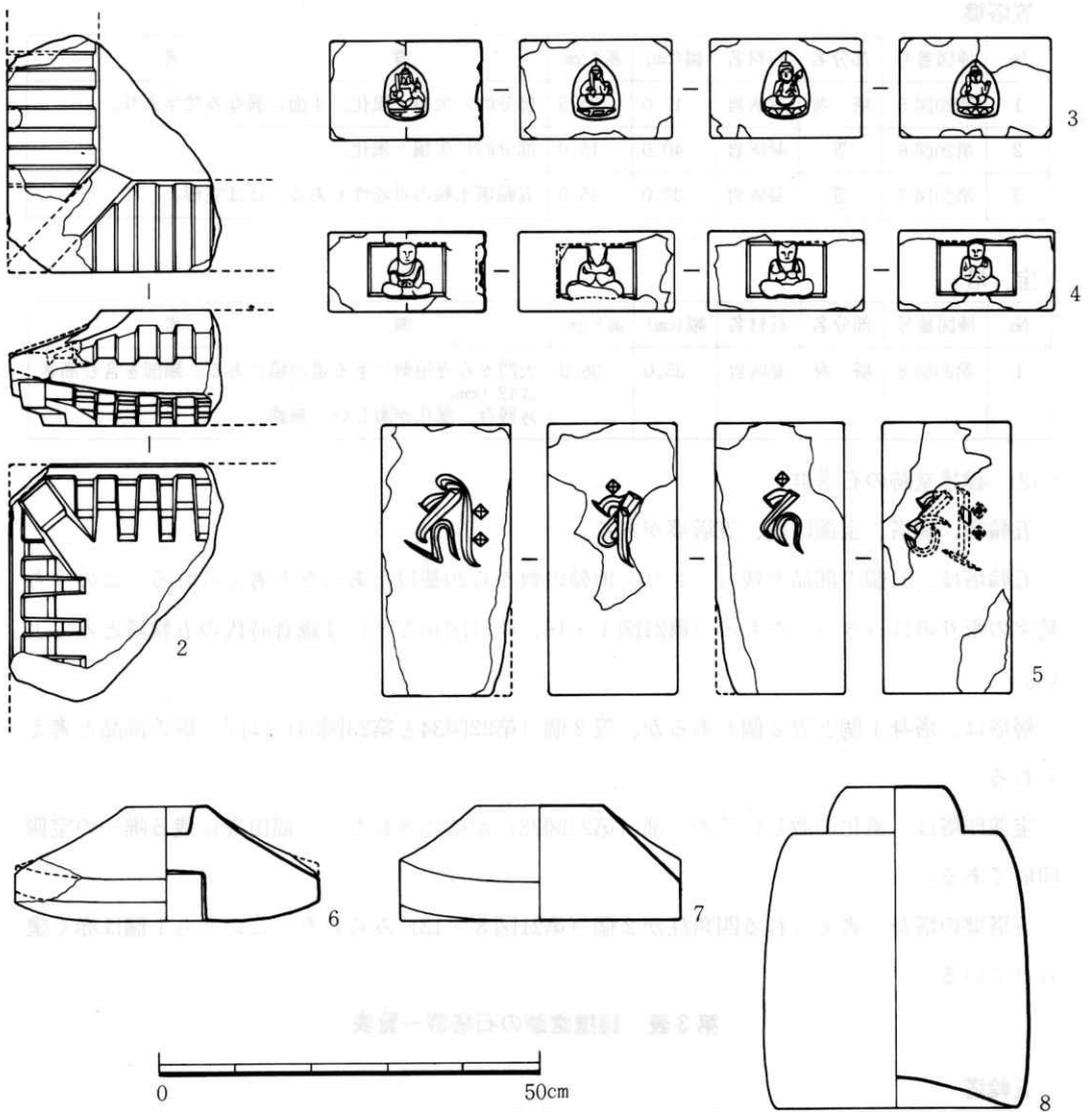
(1) 福田寺) 寺屋敷の石塔群 図19 層



1



第19図 福田寺の石塔群 (寺屋敷 I)



第20図 福田寺の石塔群（寺屋敷2）

板碑ももここにあったと言われている。

第2表 寺屋敷の石塔群一覧表

層 塔							
No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考	
1	第19図1	笠	凝灰岩	(36.0)	24.0	一部残存、復原幅約102cm。	
2	第20図2	笠	凝灰岩	(31.0)	15.0	一部残存。	
3	第20図3	塔身	凝灰岩	20.0	13.0	部分的に欠損。4面に仏像あり。No.2と一体をなす塔か？	
4	第20図4	塔身	凝灰岩	20.5	10.5	部分的に欠損・風化。4面に仏像あり。	

笠塔婆

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第20図5	塔身	凝灰岩	17.0	35.5	部分的に欠損・風化。4面に異なる梵字あり。
2	第20図6	笠	凝灰岩	40.0	15.0	部分的に欠損・風化。
3	第20図7	笠	凝灰岩	37.0	15.0	五輪塔水輪の可能性もある。ほぼ完形。

宝 塔

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第20図8	塔身	凝灰岩	35.0	36.0	大門から寺屋敷に至る道の脇にある。頸部を含む高さは42.0cm。 1/2残存、風化が激しい。無銘。

(2) 鐘撞堂跡の石塔群

五輪塔、層塔、宝篋印塔、笠塔婆がある。

五輪塔は、51個の部品が残っており、地輪の数から29基以上あったと考えられる。このうち梵字の彫りのはっきりしたもの（第21図1・16、第21図40など）は鎌倉時代の五輪塔とみてよい。

層塔は、塔身1個と笠2個があるが、笠2個（第22図34と第23図54）は同一塔の部品と考えられる。

宝篋印塔は、風化の激しい笠の一部（第22図23）が確認されたが、福田寺に残る唯一の宝篋印塔である。

笠塔婆の塔身と考えられる四角柱が2個（第21図8・13）みられた。このうち1個は赤く塗られている。

第3表 鐘撞堂跡の石塔群一覧表

五輪塔

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第21図1	火輪	凝灰岩	42.0	(21.0)	1/2程欠損。梵字は一面のみ残存。
2	第21図2	地輪	凝灰岩	35.0	22.0	部分的に欠損。無銘。
3	第21図3	地輪	凝灰岩	35.0	25.0	部分的に欠損。無銘。
4	第21図4	火輪	凝灰岩	33.0	20.0	ほぼ完形。
5	第21図5	水輪	凝灰岩	29.5	21.5	一部欠損。無銘。
6	第21図6	地輪	凝灰岩	36.0	25.0	ほぼ完形。無銘。
7	第21図7	地輪	凝灰岩	41.0	30.0	ほぼ完形。無銘。
8	第21図9	水輪	凝灰岩	30.0	21.0	部分的に欠損。4面に同じ梵字あり。
9	第21図10	地輪	凝灰岩	35.0	29.0	部分的に欠損。無銘。
10	第21図11	地輪	凝灰岩	40.0	27.0	ほぼ完形。無銘

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
11	第21図12	地輪	凝灰岩	37.0	31.0	ほぼ完形。無銘
12	第21図14	水輪	凝灰岩	41.0	28.0	完形。4面に同じ梵字あり。
13	第21図15	地輪	凝灰岩	50.0	21.0	下面が風化している。無銘。
14	第21図16	地輪	凝灰岩	56.0	(28.0)	下面が風化剥落。4面に異なる梵字あり。
15	第21図17	水輪	凝灰岩	35.0	32.0	3/5程欠損。4面に梵字があったと考えられるが、3面は欠損。
16	第22図18	水輪	凝灰岩	33.0	20.0	一部欠損。無銘。
17	第22図19	地輪	凝灰岩	37.0	15.5	上面が風化。無銘。
18	第22図20	地輪	凝灰岩	36.0	19.0	部分的に欠損。無銘。
19	第22図21	地輪	凝灰岩	42.0	16.0	一側が風化。無銘。
20	第22図22	空風輪	凝灰岩	18.0	(19.0)	風化が激しく、風輪部は欠損。
21	第22図24	火輪	凝灰岩	32.0	20.0	完形。
22	第22図25	地輪	凝灰岩	33.0	20.0	下面が風化。無銘。
23	第22図26	地輪	凝灰岩	39.0	23.0	部分的に欠損。無銘。
24	第22図27	地輪	凝灰岩	46.0	41.0	ほぼ完形。無銘。
25	第22図28	水輪	凝灰岩	31.0	(15.5)	3/5程欠損。復原高22.0cm。無銘。
26	第22図29	火輪	凝灰岩	37.0	22.0	完形。
27	第22図30	水輪	凝灰岩	32.0	21.0	一部欠損。無銘。
28	第22図31	地輪	凝灰岩	38.0	25.0	2側面の風化が激しい。無銘。
29	第22図32	地輪	凝灰岩	41.0	33.0	上面がやや風化。無銘。
30	第22図33	火輪	凝灰岩	36.0	21.0	部分的に欠損。無銘。
31	第22図35	地輪	凝灰岩	29.0	14.0	欠損・風化が激しい。無銘。
32	第22図36	地輪	凝灰岩	35.0	16.0	欠損・風化が激しい。無銘。
33	第22図37	地輪	凝灰岩	36.0	22.0	全体的に風化。無銘。
34	第22図38	地輪	凝灰岩	35.0	26.0	ほぼ完形。無銘。
35	第22図40	水輪	凝灰岩	50.0	34.0	2側面が大きく欠損。梵字はもと4面にあったと考えられる。
36	第23図41	水輪	凝灰岩	31.0	20.0	風化が激しい。梵字は4面にあるが、1面は風化、他の3面も読みにくい。
37	第23図42	火輪	凝灰岩	31.0	19.0	ほぼ完形。無銘。
38	第23図43	地輪	凝灰岩	36.0	23.0	上・下面とも風化が激しい。無銘。
39	第23図44	地輪	凝灰岩	34.0	22.0	部分的に欠損。無銘。
40	第23図45	地輪	凝灰岩	37.0	26.0	風化が激しい。4面に同じ梵字あり。銘文は「阿闍梨長賢、寛正三壬午卯五日」と考えられる。寛正3年(1462)。
41	第23図46	水輪	凝灰岩	42.0	(25.0)	風化が激しい。復原高30.0cm。4面に梵字があるが、一面以外は不明瞭。
42	第23図47	火輪	凝灰岩	33.0	13.0	上部欠損、残存部も風化。復原高20.0cm。
43	第23図48	地輪	凝灰岩	35.0	15.0	部分的に欠損。無銘。
44	第23図49	水輪?	凝灰岩	(28.0)	(20.0)	水輪の風化したものと考えられる。

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
45	第23図50	火輪	凝灰岩	42.0	31.0	ほぼ完形。
46	第23図51	地輪	凝灰岩	37.0	23.0	部分的に欠損。無銘。
47	第23図52	地輪	凝灰岩	37.0	20.0	部分的に欠損。無銘。
48	第23図53	地輪	凝灰岩	53.0	38.0	上面は風化、全体が2つに割れている。無銘。
49	第23図55	火輪	凝灰岩	48.0	36.0	部分的に欠損。
50	第23図56	火輪	凝灰岩	52.0	37.0	ほぼ完形。
51	第23図57	地輪	凝灰岩	48.0	35.0	山本磨氏宅の裏にあるもの。いくぶん風化。銘文の年号は「嘉曆貳年丁卯五九日」と解することができる。嘉曆2年(1327)。

層塔

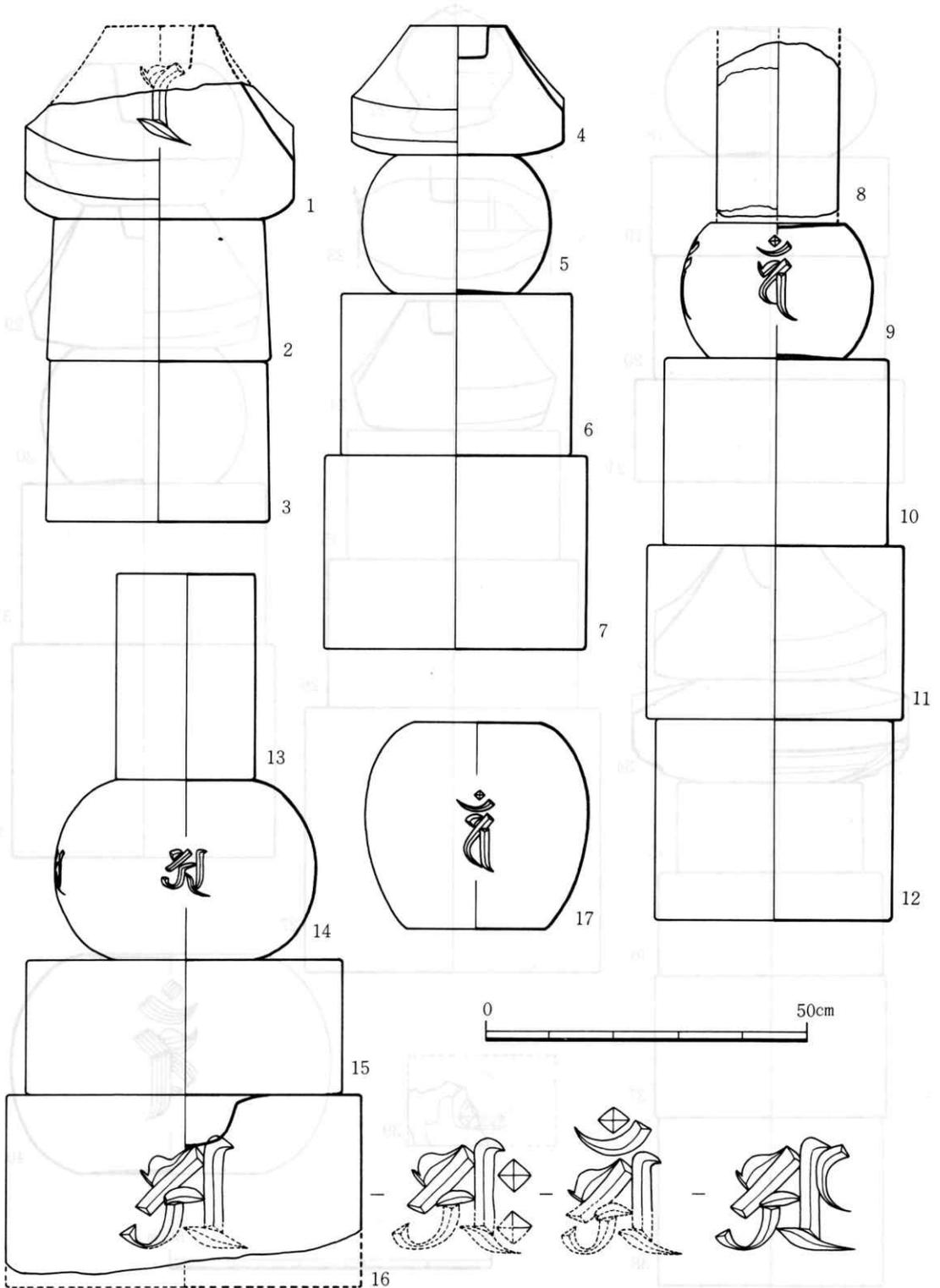
No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	第22図34	笠	凝灰岩	43.0	16.0	1/2程欠損。無銘。
2	第22図39	塔身	凝灰岩	(12.5)	(10.0)	一部のみ残存。復原幅23.0cm、同高さ14.0cm。仏像あり。
3	第23図54	笠	凝灰岩	42.0	15.0	完形。No.34と一体となる塔と考えられる。

宝篋印塔

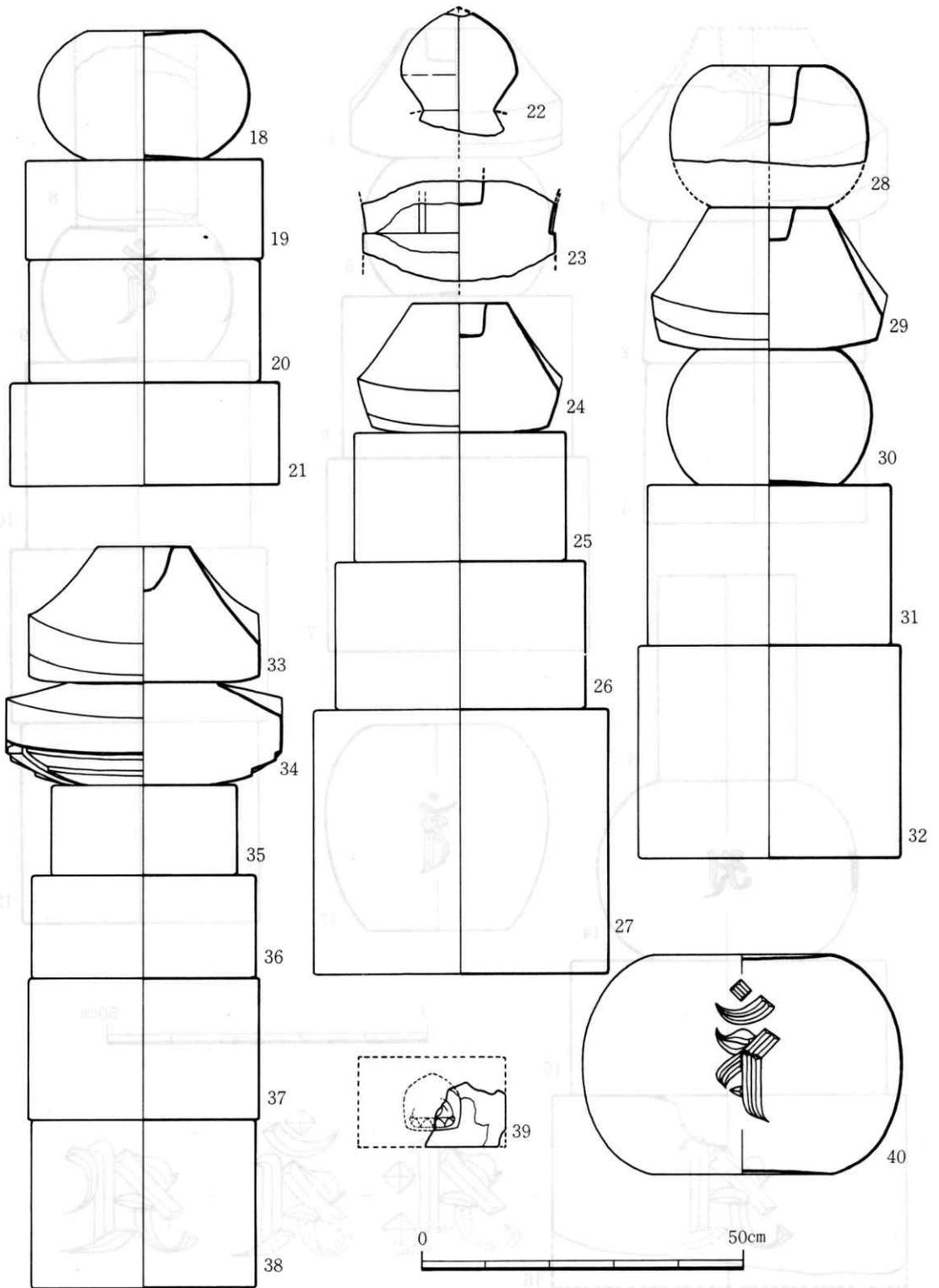
No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	第22図23	笠	凝灰岩	(30.5)	(15.5)	風化が激しく、一部のみ残存。

笠塔婆

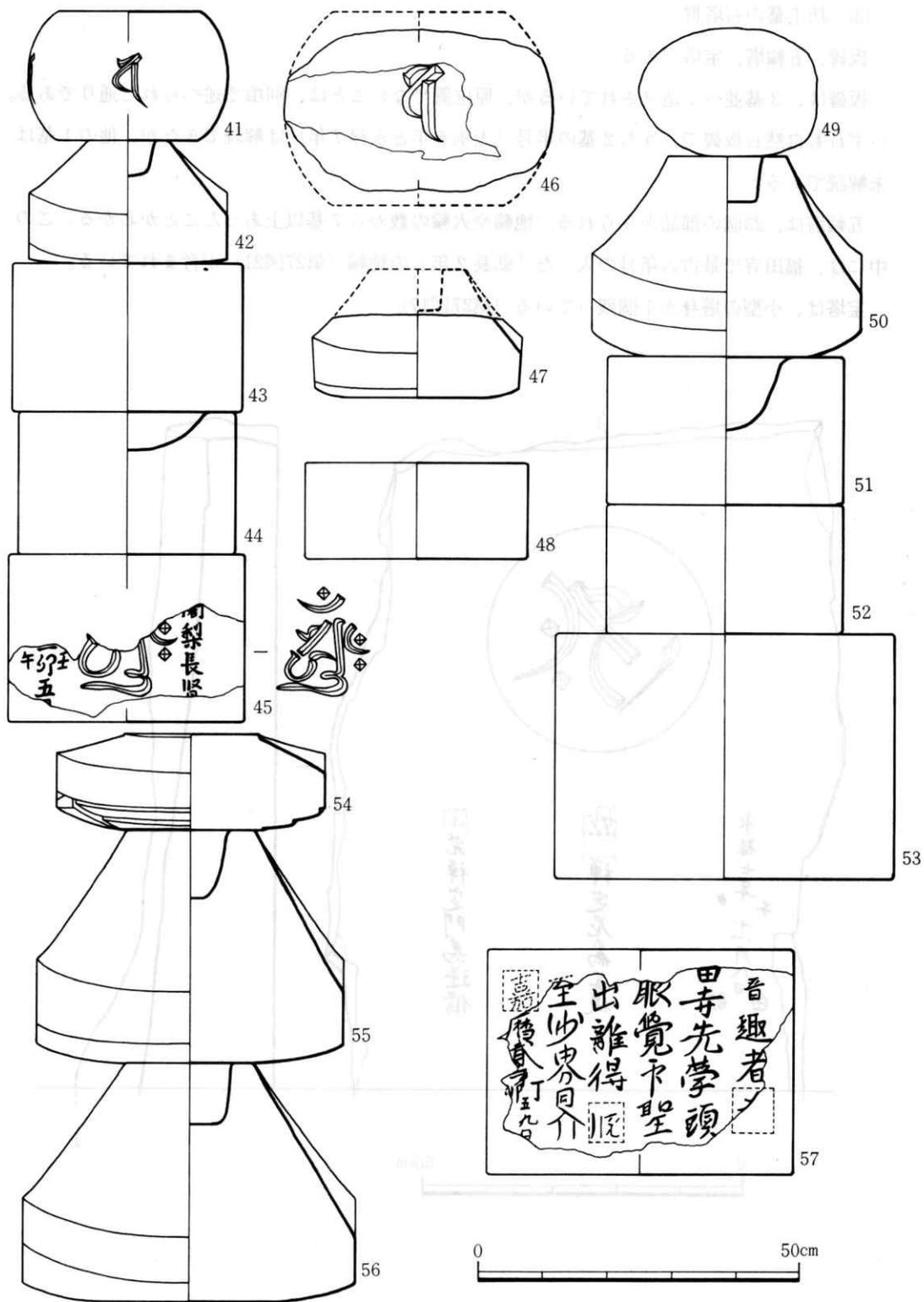
No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	第21図8	塔身	凝灰岩	19.0	(27.0)	上下を欠損。赤く塗られている。
2	第21図13	塔身	凝灰岩	22.0	32.0	風化が激しい。無銘。



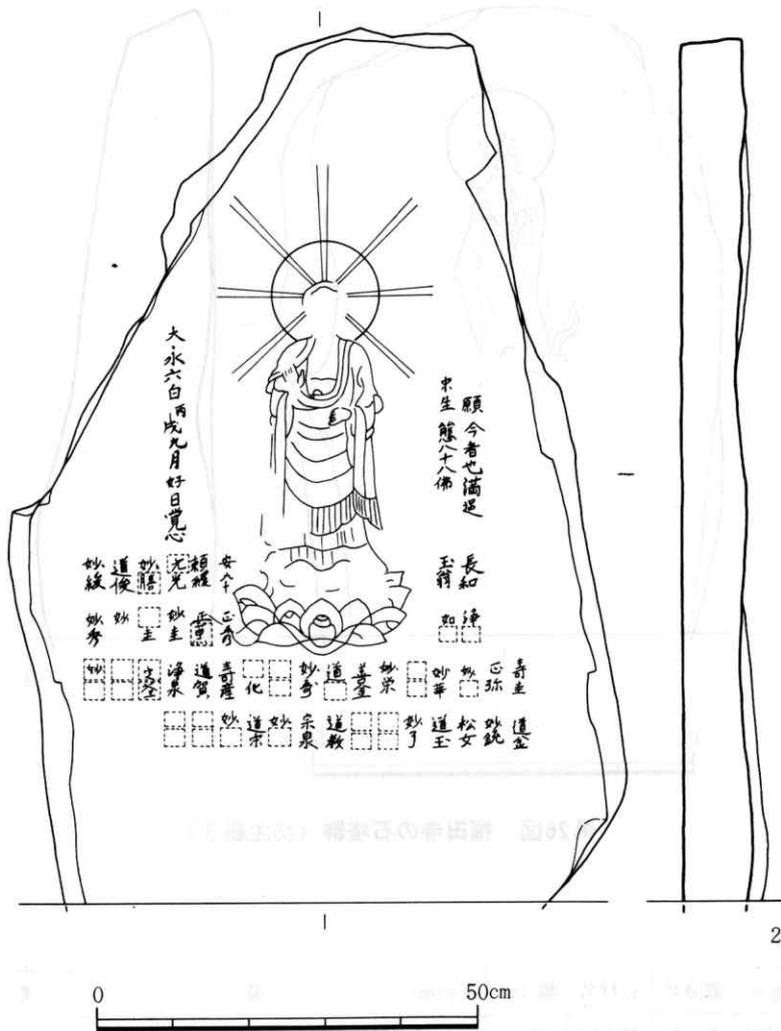
第21図 福田寺の石塔群（鐘撞堂跡I）



第22図 福田寺の石塔群（鐘撞堂跡2）



第23図 福田寺の石塔群（鐘撞堂跡 3）

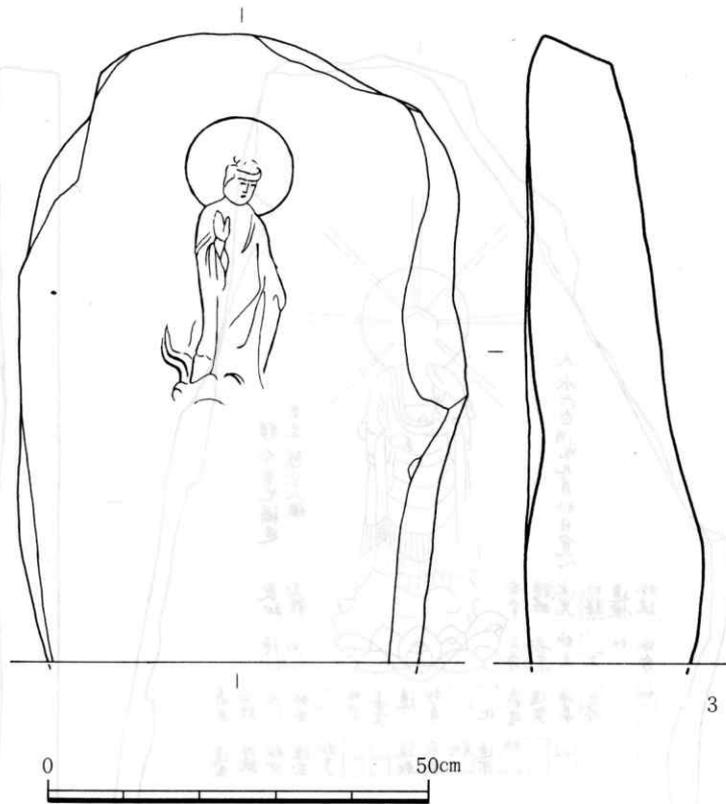


第25図 福田寺の石塔群（坊主墓2）

第4表 坊主墓の石塔一覧表

板 碑

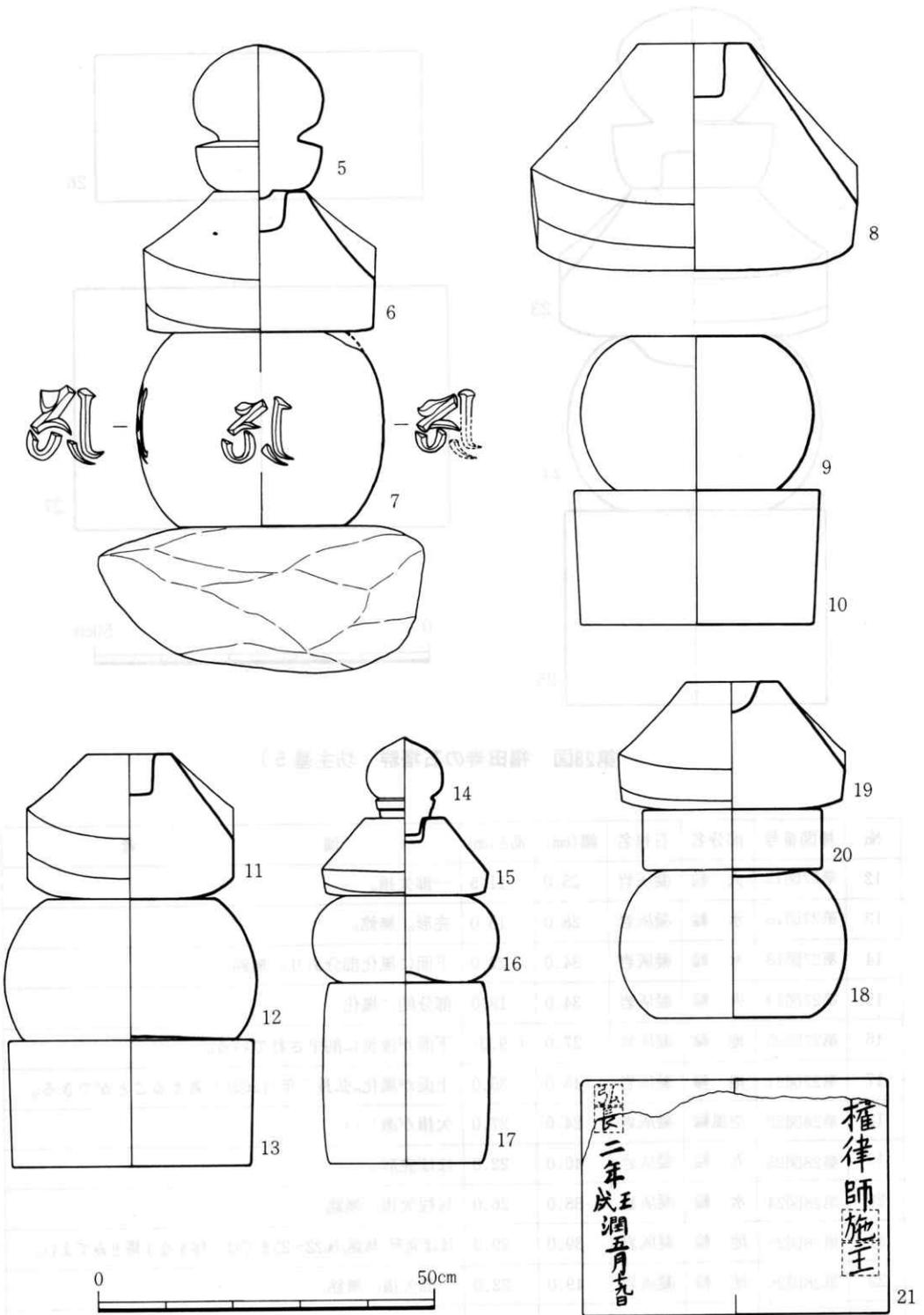
No	挿図番号	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備 考
1	第24図1	凝灰岩	80.5	104.0	31.0	高さは地上高。完形。銘文の年号は「永禄七年申子十一月八日」。永禄7年(1564)。
2	第25図2	砂 岩	76.0	115.0	110.0	高さは地上高。完形であるがやや風化。銘文の年号は「大永六丙戌九月好日」。大永6年(1526)。
3	第26図3	砂 岩	59.0	82.5	23.5	高さは地上高。完形であるが表面風化。銘文があるが未解読



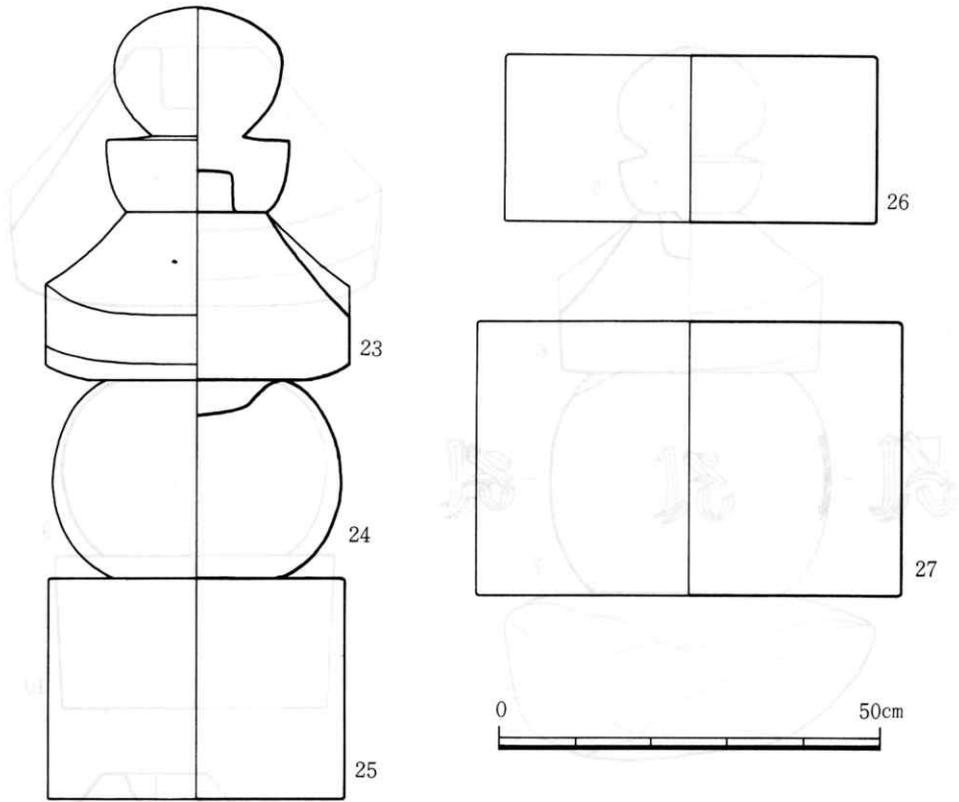
第26図 福田寺の石塔群（坊主墓3）

五輪塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅 (cm)	高さ (cm)	備 考
1	実測不能	火 輪	凝灰岩	(29.0)	(15.0)	風化が激しい。
2	第27図5	空風輪	凝灰岩	19.5	22.0	部分的に欠損。柄部を含む高さは23.0cm。
3	第27図6	火 輪	凝灰岩	35.0	21.0	部分的に欠損。
4	第27図7	水 輪	凝灰岩	37.0	29.0	欠損が激しい。4面に同じ梵字があるが一面は欠損。
5	第27図8	火 輪	凝灰岩	49.0	34.0	部分的に欠損。
6	第27図9	水 輪	凝灰岩	35.0	23.0	部分的に欠損。無銘。
7	第27図10	地 輪	凝灰岩	37.0	20.0	部分的に欠損。無銘。
8	第27図11	火 輪	凝灰岩	31.0	21.5	下面が一部剝落。
9	第27図12	水 輪	凝灰岩	38.0	21.0	下面は後世に削平か？ 無銘。
10	第27図13	地 輪	凝灰岩	37.0	19.0	部分的に欠損。無銘。
11	第27図14	空風輪	凝灰岩	11.5	12.0	1/3程欠損。柄部を含む高さ14.5cm。



第27図 福田寺の石塔群（坊主墓4）



第28図 福田寺の石塔群 坊主基5)

No	挿図番号	部分名	石材名	幅 (cm)	高さ (cm)	備	考
12	第27図15	火輪	凝灰岩	25.0	11.5	一部欠損。	
13	第27図16	水輪	凝灰岩	28.0	13.0	完形。無銘。	
14	第27図18	水輪	凝灰岩	34.0	22.0	下面に風化部分あり。無銘。	
15	第27図19	火輪	凝灰岩	34.0	19.0	部分的に風化。	
16	第27図20	地輪	凝灰岩	27.0	(9.0)	下面が後世に削平されている。	
17	第27図21	地輪	凝灰岩	46.0	35.0	上面が風化。弘長二年(1262)と考えることができる。	
18	第28図22	空風輪	凝灰岩	24.0	27.0	欠損が激しい。	
19	第28図23	火輪	凝灰岩	40.0	22.0	ほぼ完形。	
20	第28図24	水輪	凝灰岩	38.0	26.0	1/3程欠損。無銘。	
21	第28図25	地輪	凝灰岩	39.0	29.0	ほぼ完形。無銘。No.22~25までは一体をなす塔とみてよい。	
22	第28図26	地輪	凝灰岩	49.0	22.0	一部欠損。無銘。	
23	第28図27	地輪	凝灰岩	56.0	36.0	ほぼ完形。無銘	

宝 塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅 (cm)	高さ (cm)	備 考
1	第27図17	塔 身	凝灰岩	25.0	27.0	完形。無銘。

(4) 片平山の石塔群

五輪塔と宝塔がある

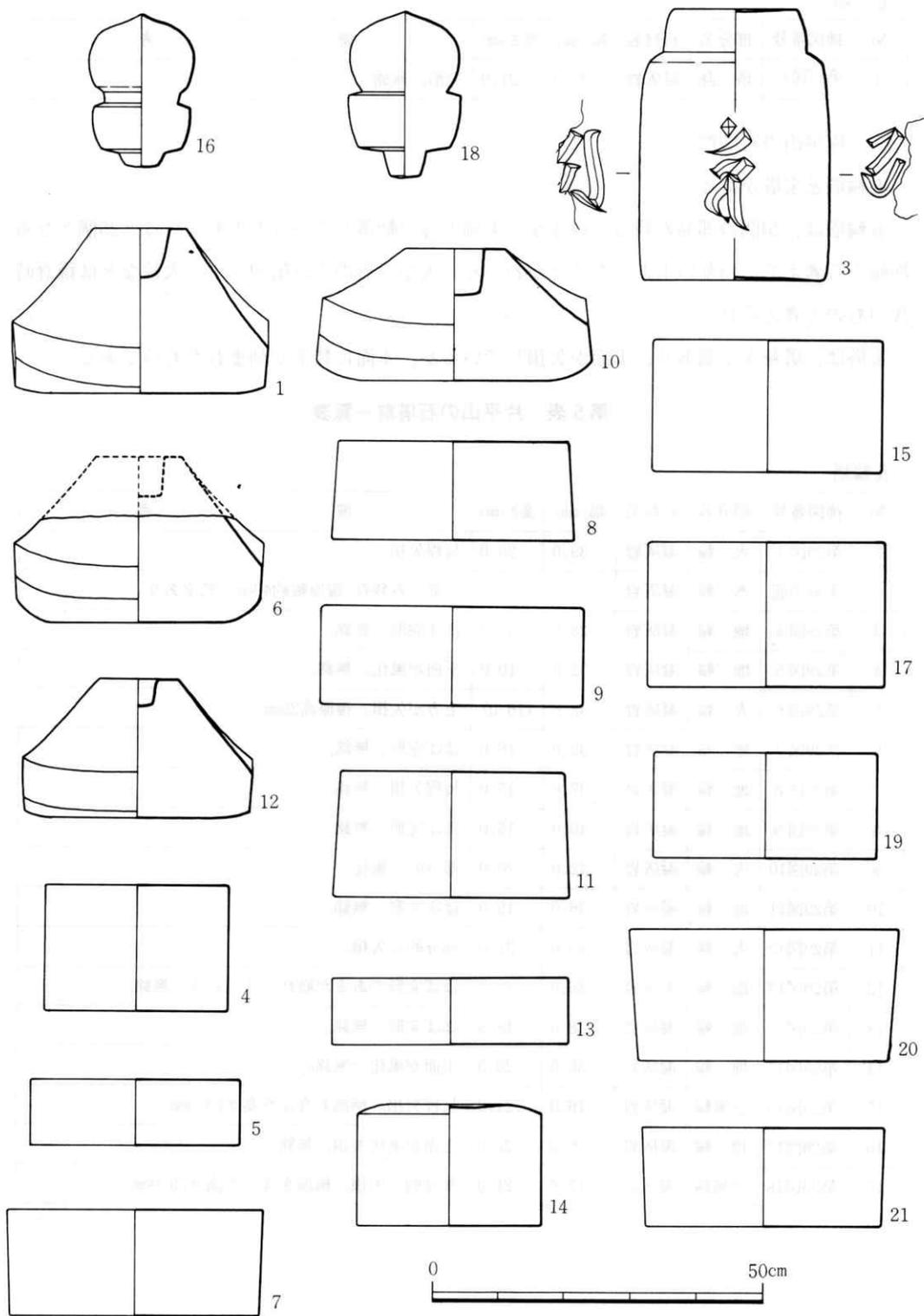
五輪塔は、20個の部品が残っているが、東側の谷に転落しているものも含めると25個となる。地輪から考えて、13基以上あったことがわかる。大型で形のよい第29図1の火輪などは鎌倉時代のものと考えられる。

宝塔は、塔身が1個あり、1面が欠損しているが、4面に梵字が刻まれたものである。

第5表 片平山の石塔群一覧表

五輪塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅 (cm)	高さ (cm)	備 考
1	第29図1	火 輪	凝灰岩	39.0	25.0	¼程欠損。
2	実測不能	水 輪	凝灰岩	—	—	一部のみ残存。復原幅約40cm。梵字あり。
3	第29図4	地 輪	凝灰岩	28.0	19.0	ほぼ完形。無銘。
4	第29図5	地 輪	凝灰岩	32.0	10.0	下面が風化。無銘。
5	第29図6	火 輪	凝灰岩	38.0	(16.0)	上方が欠損。復原高25cm。
6	第29図7	地 輪	凝灰岩	39.0	16.0	ほぼ完形。無銘。
7	第29図8	地 輪	凝灰岩	37.0	15.0	¼程欠損。無銘。
8	第29図9	地 輪	凝灰岩	40.0	15.0	ほぼ完形。無銘。
9	第29図10	火 輪	凝灰岩	42.0	20.0	部分的に風化。
10	第29図11	地 輪	凝灰岩	36.0	19.0	ほぼ完形。無銘。
11	第29図12	火 輪	凝灰岩	35.0	21.0	部分的に欠損。
12	第29図13	地 輪	凝灰岩	36.0	10.0	ほぼ完形であるが崩れかけている。無銘。
13	第29図14	地 輪	凝灰岩	28.0	18.5	ほぼ完形。無銘。
14	第29図15	地 輪	凝灰岩	35.0	20.0	上面が風化。無銘。
15	第29図16	空風輪	凝灰岩	16.0	21.0	¼程欠損。柄部も含んだ高さ23.0cm。
16	第29図17	地 輪	凝灰岩	36.0	22.0	上面が風化欠損。無銘。
17	第29図18	空風輪	凝灰岩	17.0	21.0	部分的に欠損。柄部も含んだ高さ25.0cm。

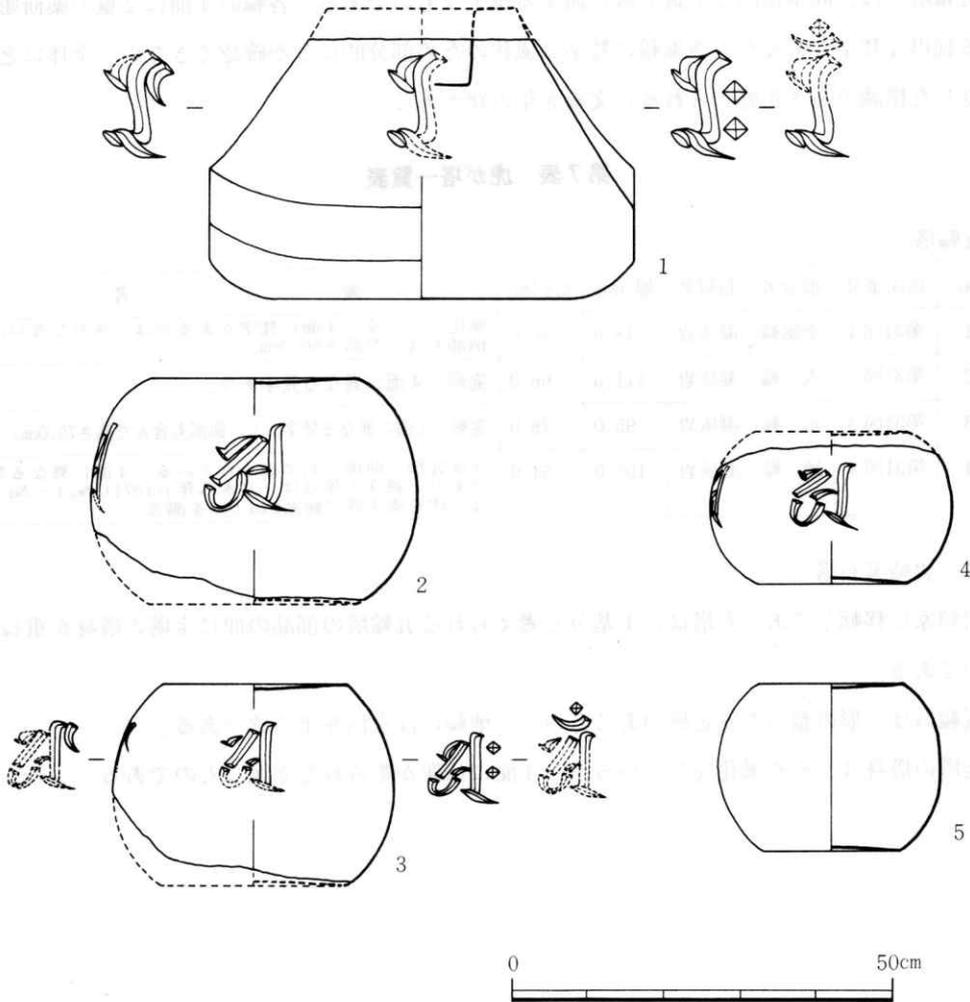


第29図 福田寺の石塔群 (片平山)

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
18	第30図19	地 輪	凝灰岩	34.0	16.0	部分的に欠損。無銘。
19	第30図20	地 輪	凝灰岩	41.0	20.0	完形。無銘。
20	第30図21	地 輪	凝灰岩	37.0	15.0	部分的に欠損。無銘。

宝 塔

No.	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第29図3	塔 身	凝灰岩	29.0	41.0	1/4程欠損。4面に異なる梵字があるが一面は完全に欠損。



第30図 福田寺の石塔群 (片平山東麓に転落したもの)

第6表 片平山東麓に転落した石塔群一覧表

五輪塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第30図1	火 輪	凝灰岩	56.0	(34.0)	上部欠損、復原高38.0cm。4面に異なる梵字あり。
2	第30図2	水 輪	凝灰岩	43.0	(29.0)	下部欠損、復原高39.5cm。4面に同じ梵字あり。
3	第30図3	水 輪	凝灰岩	37.0	(26.0)	下部欠損、復原高26.5cm。4面に異なる梵字あり。
4	第30図4	水 輪	凝灰岩	32.0	(18.0)	上部欠損、復原高20.0cm。4面に同じ梵字あり。
5	第30図5	水 輪	凝灰岩	29.0	22.0	ほぼ完形。無銘。

(5) 虎が塔

虎が塔と呼ばれているのは、完存した1基の五輪塔（第30図）で、総高246cmを測り、中世の五輪塔では、熊本県内でも最大級に属する雄大なものである。各輪の4面に2重の薬研彫による独得な梵字があるが、空風輪の梵字は風化のため部分的にしか確認できない。全体にどっしりした格調の高さを感じられる。文永8年の銘がある。

第7表 虎が塔一覧表

五輪塔

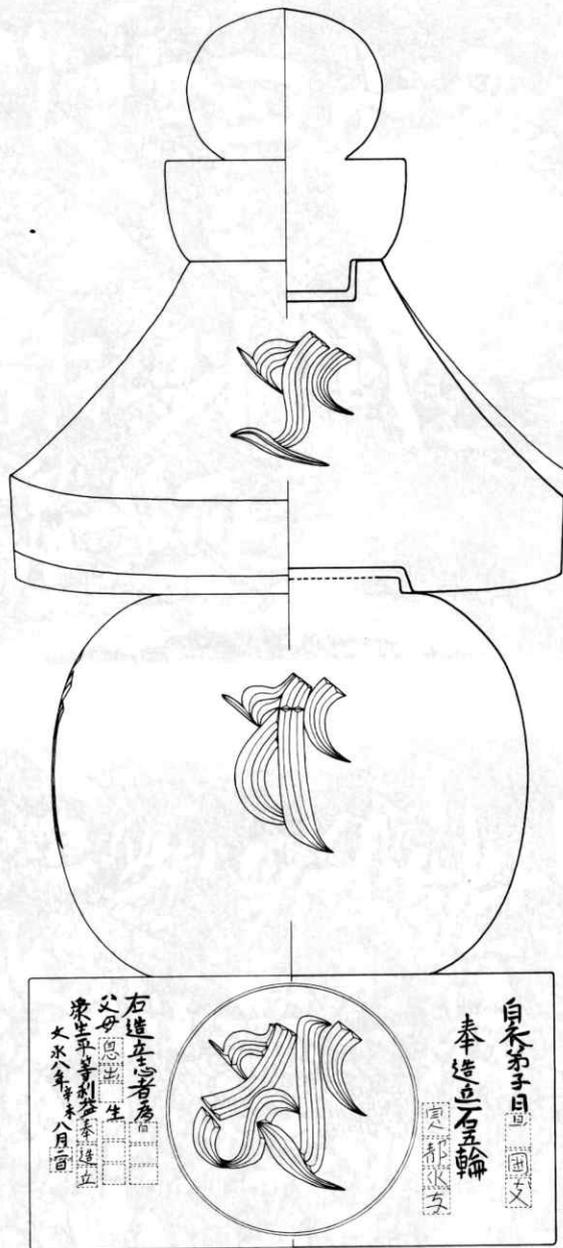
No	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備 考
1	第31図1	空風輪	凝灰岩	48.0	50.0	風化している。4面に梵字があるがはっきりしない。柄部も含んだ高さ56.0cm。
2	第31図2	火 輪	凝灰岩	111.0	66.0	完形。4面に異なる梵字あり。
3	第31図3	水 輪	凝灰岩	95.0	76.0	完形。4面に異なる梵字あり。頸部も含んだ高さ79.0cm。
4	第31図4	地 輪	凝灰岩	105.0	54.0	ほぼ完形。前後2石で造られている。4面に異なる梵字あり。銘文の年号は「文永八年」(1271)。No.1～No.4は一体を成す塔で総高246.0cmを測る。

(6) 岩崎家石塔

岩崎家に移転してある石塔は、1基分と考えられる五輪塔の部品の上に宝塔の塔身を重ねたものである。

五輪塔は、形の整った安定感のあるもので、地輪には永仁5年の銘がある。

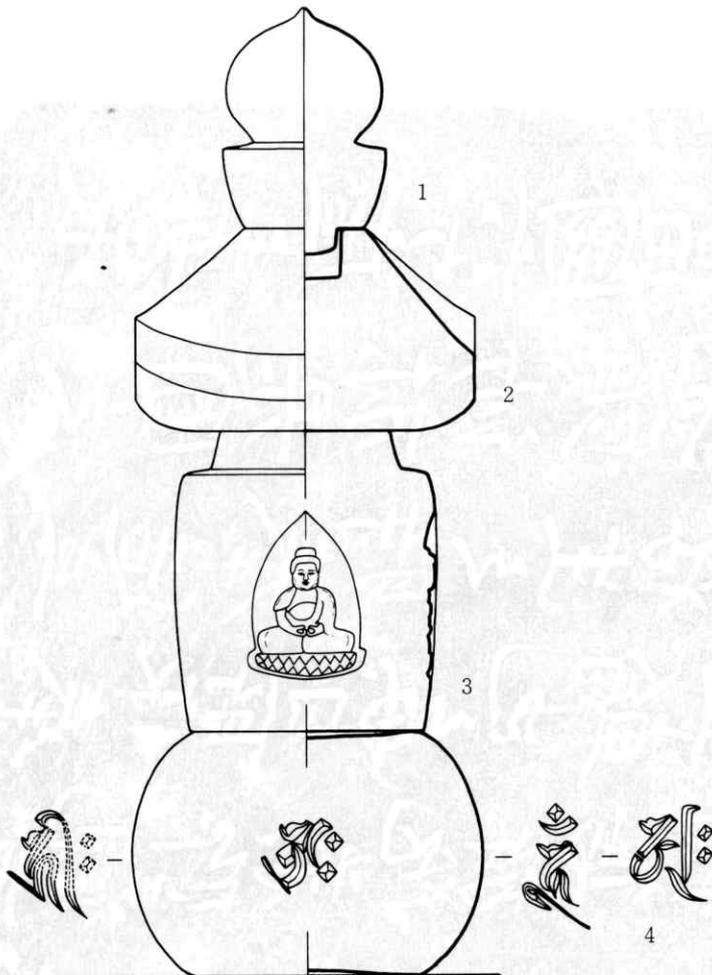
宝塔の塔身は、やや風化をしているが、4面に仏像が彫られた立派なものである。



第31図 福田寺の石塔群（虎が塔）



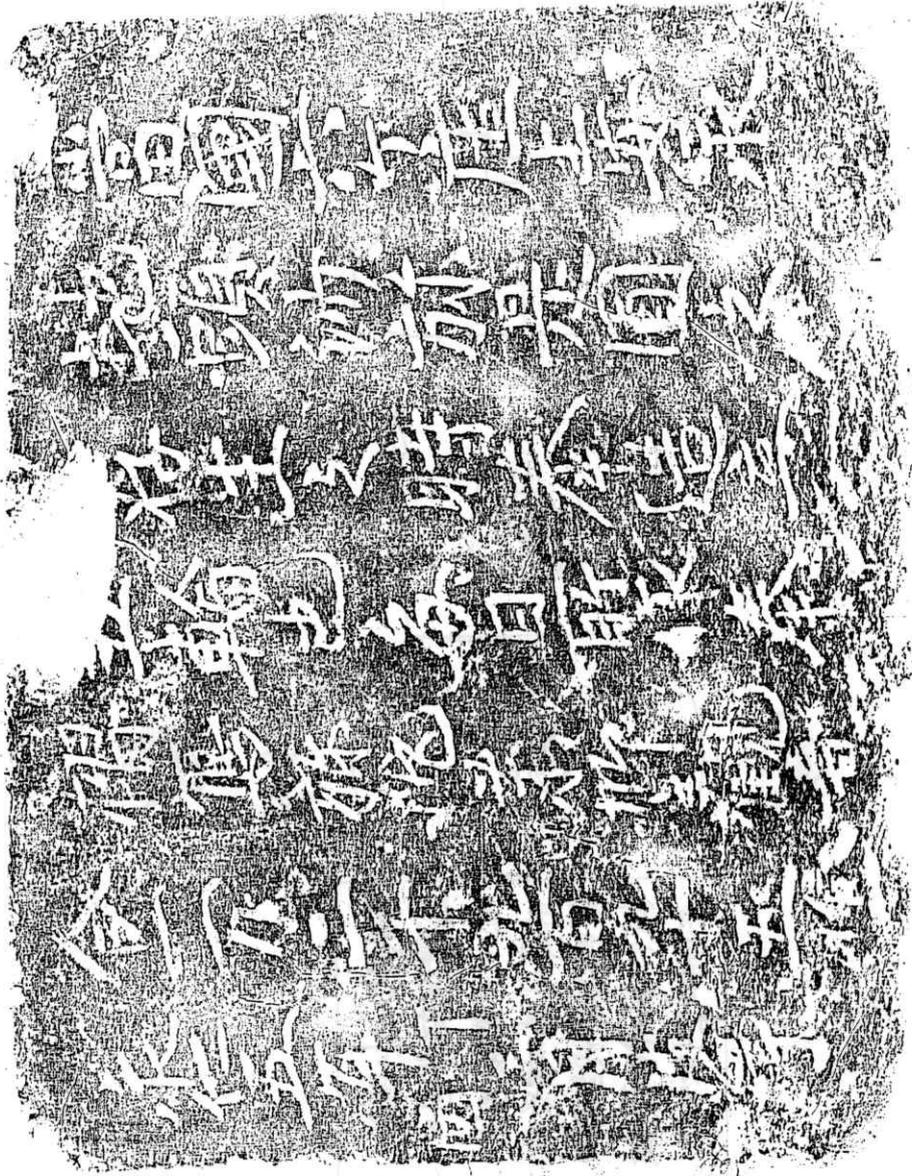
第32図 福田寺の石塔群（虎が塔銘文拓本）



當國石庄上安永
 地頭沙林是圓之
 存生之時奉造立
 五輪也每日所作奉
 相馬旅陀系竹觀音
 合一万二千九百五
 十三年丁三月庚序



第33図 福田寺の石塔群 (岩崎家石塔)



第34図 福田寺の石塔群（岩崎家五輪塔銘文拓本）

第8表 岩崎家石塔一覧表

五輪塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	第33図1	空風輪	凝灰岩	21.5	29.0	部分的に欠損。柄部を含む高さ32.5cm。
2	第33図2	火輪	凝灰岩	44.5	26.5	1/4程欠損。
3	第33図4	水輪	凝灰岩	46.0	32.0	ほぼ完形。4面に異なる梵字あり。
4	第33図5	地輪	凝灰岩	51.0	39.5	完形。銘文の年号は「永仁五年」(1297)。No1、2、4、5は一体を成す塔と考えられる。

宝塔

No	挿図番号	部分名	石材名	幅(cm)	高さ(cm)	備考
1	第33図3	塔身	凝灰岩	34.5	34.5	風化が激しい。頸部を含む高さは39.5cm。4面に異なる仏像あり。

2. 福田寺のその他の遺物

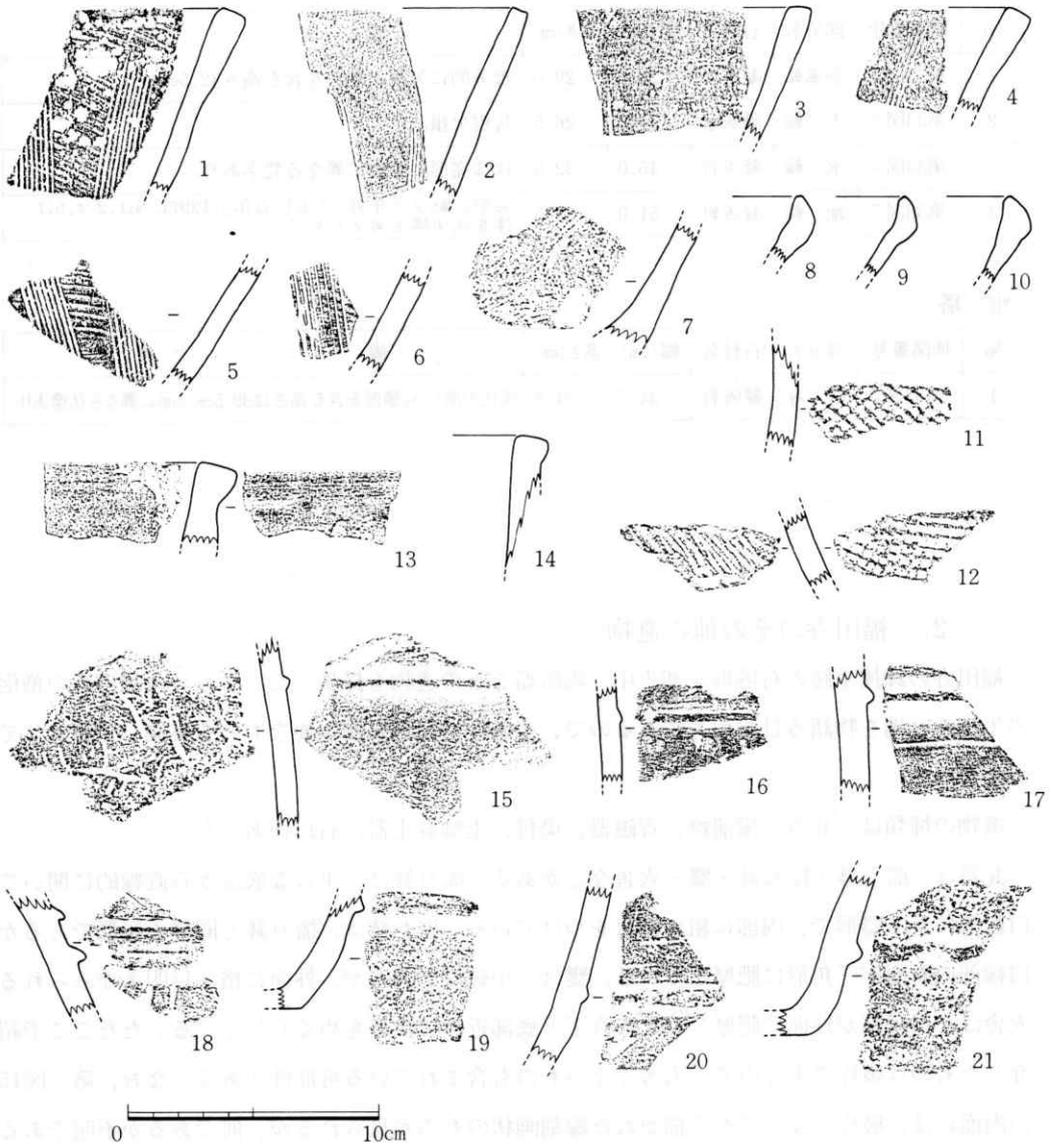
福田寺の鐘撞堂跡の石塔群を調査中に陶磁器などの遺物を採集した。これらは福田寺の僧侶の生活の一端を物語る日常用具であるので、小破片ではあるが主要なものを実測して紹介しておきたい。

遺物の種類は、瓦器、備前焼、青磁器、染付、土師質土器、石臼があった。

瓦器は、播り鉢・捏ね鉢・甕・火舎などがある。播り鉢は、平らな底部から直線的に開いて口縁部に至る器形で、内部に粗い櫛目をつけている。捏ね鉢は、播り鉢と同様の器形であるが口縁部の断面が三角形に肥厚している。甕は、小破片であるが、外面に格子目叩きが見られる。火舎は、口縁部が外側に肥厚し、その直下と底部近くに突帯をめぐらしている。ただここで紹介したものは破片であるので、火舎でないものも含まれている可能性がある。なお、第 図15の内面には、破片になってから描かれた線刻画状のものが見られるが、何であるか不明である。これらの瓦器類は、県内の窯で焼かれたのではないかと考えられる。

備前焼は、播り鉢と甕がある。播り鉢は、底部付近の破片であるが、口縁部は断面が三角形に肥厚している器形と考えられる。甕は、底面は平らで広く、長胴で、頸部は直立し、玉縁となっている。いずれも焼成は非常に良い。なお、甕のうち大型のものは埋葬に使用された可能性もある。

青磁器は碗と蓋がある。碗は、高台のがつりしたもので、外面の蓮華文は、花卉のはっきりしたもの、簡略化したものがある。蓋は、壺状の小形の容器にかぶせるものと考えられ、上面に2重にめぐらした花卉が描かれ、その中央に紐を通すつまみが付いている。



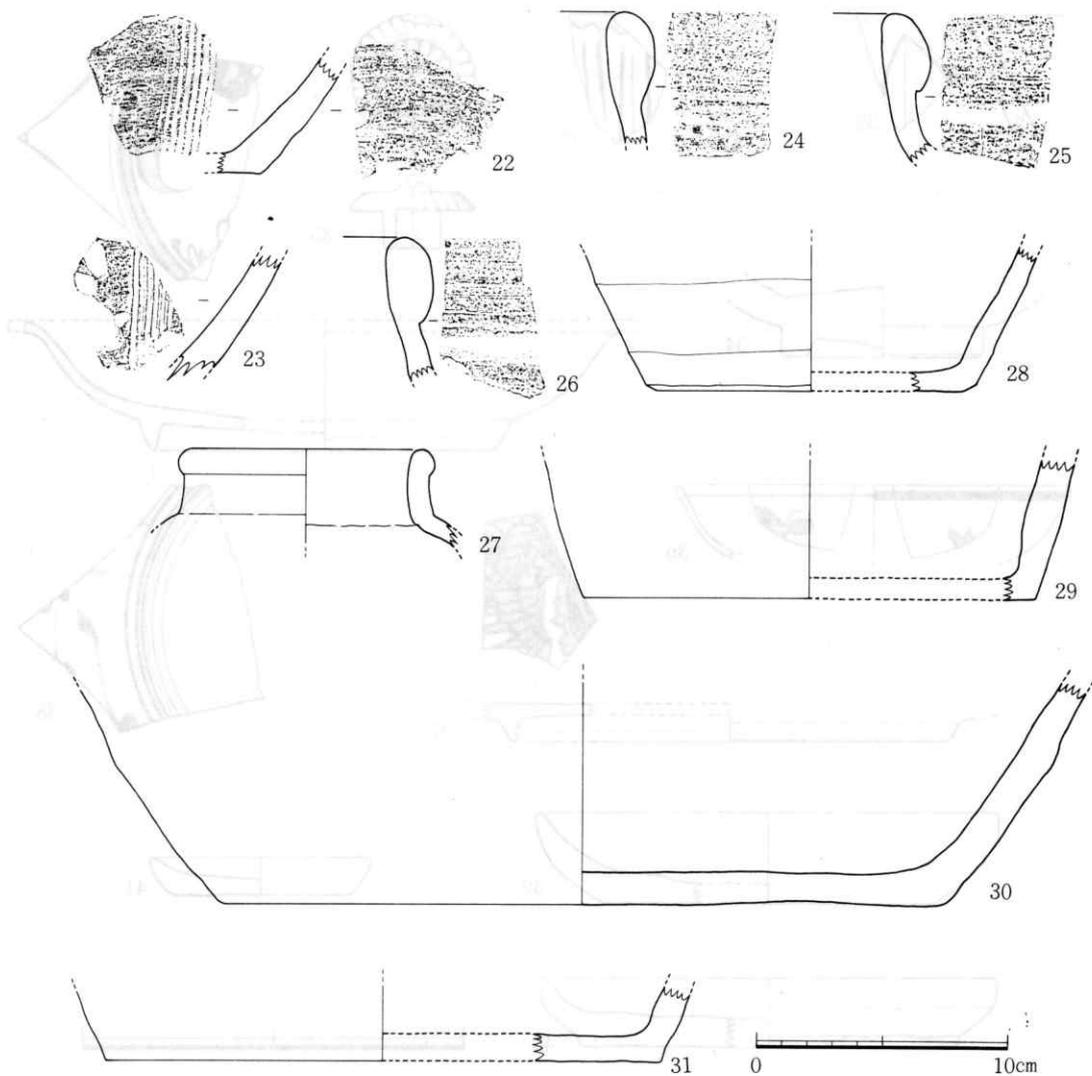
第35図 福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）I

1～21瓦器（1～7 播り鉢、8～10 捏ね鉢、11, 12 甕、～21 火舎ほか）

染付は、いずれも皿で、やや大型のものや小型のものがあり、大型の皿の1枚には内面に龍が描かれ、他の1枚には内面に花、外面に唐草状のものが描かれている。

土師質の皿が数枚あった。やや大型と小型があり、いずれも底面に糸切り痕が残っている。

石臼の部品と考えられるものが3個発見された。第37図42は、石臼の台ではないかとみられ

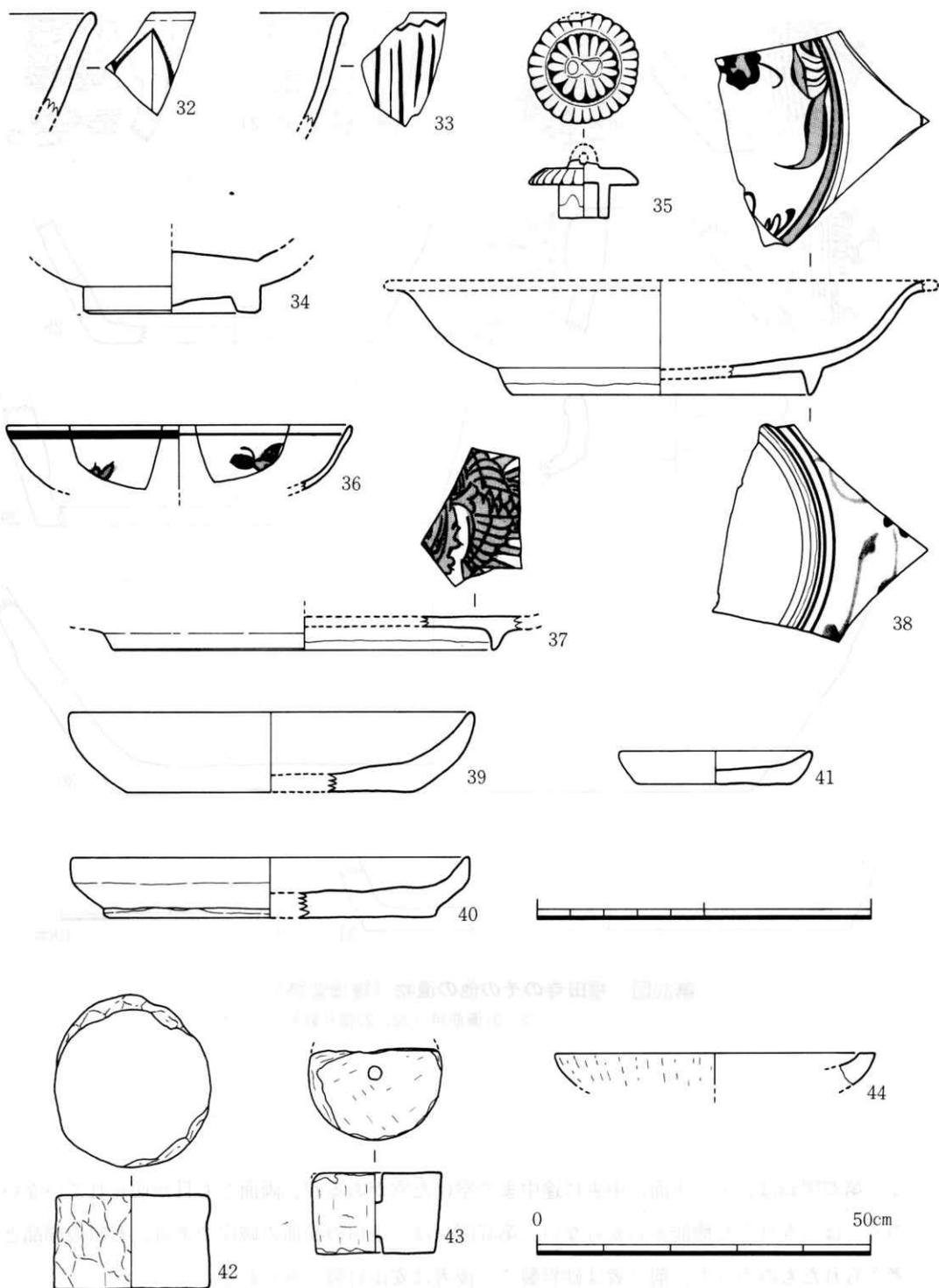


第36図 福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）2

22-31備前焼（22、23播り鉢）

る。第37図43は、上・下面の中央に途中まで空けた穴があるが、両面とも目が切られていないので、はっきりした機能がわからない。第37図44は、下白の受皿の破片である。石臼の部品と考えられたもののうち、前二者は砂岩製で、後者は安山岩製とみられる。

（高木正文）



第37図 福田寺のその他の遺物（鐘撞堂跡）3

(三) 福田寺跡調査のまとめ

福田寺は「朝来名山一帯を副し境内一里四方に亘」（上益城郡史）とされる地域であり、現地の記録をするにしても、山林という悪条件が災いし、地形図作成にしても満足のいく結果は得られなかった。福田寺についての基本的文献といえる肥後國誌および上益城郡史、熊本県史蹟調査報告がその記載内容が必ずしも一致せず、また伝承にしても人によって異なっていて地域名称の現地の照合にしても疑心暗鬼のまま現地入りすることになった。これらの問題は、本来予備調査の段階で解決しておくべきことであるが予算、陣容などの不足からそれが出来なかったことが惜まれる。

福田寺における各地域名称として、寺屋敷、鐘撞堂、或は片平山、坊主墓などの名称を用いたが、これらについてもその適否については今後なお検討さるべき事柄である。今回の調査は、現状把握を主眼にし、地形図をもとに現地における石造物の分布の状況を記録することにした。また個々の石造物については実測、写真撮影等の手段を用い記録をとった。

福田寺ゆかりの石造物で、現地を離れ散逸したのも少なくない。そのうち土山の岩崎家永仁5年五輪塔、及び阿蘇郡西原村宮山の山本家の文永8年五輪塔（即ち虎が塔）については実測を行った。しかし、これまでも指摘されている永仁3年の五輪塔については、その行方は依然としてわからなかった。

以下、現地調査の資料をもとに2、3検討してみたい。

寺屋敷は史蹟調査報告に「約二反許は附近の地よりも少々低く且つ平」ということになっているが、地貌の状態は図示した寺屋敷に似ているが、面積では二反の半分程度であった。また「前記（永仁3年及び同5年銘五輪塔台石）の如き塔石の存す」としているが、今次の調査で、寺屋敷から層塔などの塔片を採取している。「其の遺跡の今尚寺屋敷」の用法からすると、永仁3年及永仁5年の五輪塔はこの地域にあった可能性は強い。

三基の板碑については作本老の証言と史蹟調査報告の記録は一致する。二基は坊主墓に移し、他の一基は下砥川（元飯野村）の松田登氏前庭の大永4年の板碑とみられる。

上益城郡史は下宮を鬼の窟のあたりとし、「中宮即本堂跡は畑となりて広き三反歩許」としているが、これが寺屋敷と同一か、それとも別の場所を意味するかについては検討を要する事柄で、同じとした場合史蹟調査報告の「約二反許」との数値の相違がどの程度実状を反映しているのか分らなくなる。

寺屋敷と呼ばれている地域には建物の礎石を思わせる平石が点在するが戦後の開墾により大きく様変わりしている。本堂等の確認、五輪塔における地下埋設遺構については将来発掘調査等の手段を講ずれば或程度の結論は出るかもしれない。

山本家裏の鐘撞堂、そして多量の集積した石塔類が何を意味するのか、今のところ直接の手

掛りとなるものは石塔類と採集した青磁等の破片（埋納品か）であるが寺房そのものについては定かでない。

史蹟調査書に大門についての記載にはじまり、「且つ経塚と云ひて稍々隆起して眺望殊に佳なる小丘あり」として、福田寺の経塚ではないかとしている。状況から言って山本家裏の鐘撞堂としたところが眺望佳なる小丘の感がするが、今迄のところ開墾により経筒の発見されたことを聞かない。検討を要する事柄である。

片平山及び坊主墓^{*}（二基の板碑を除く）の石塔は福田寺に関わる墓地とみられるが、郡史のいう「中宮下宮の門にある一小丘は松林頂を没す即鐘樓の跡」というが、それは具体的にどの地点のことを指さすのか、今のところはっきりしない。

福田寺の草創について肥後國誌は「台宗ノ古迹ト云山號開基等不分明」としただけであるが、塔碑の銘文からして鎌倉期に上ることは確実であるが、以後の変遷については伝承の中に消え知るところが少ない。福田寺の末寺と言われる安養寺は、少なくとも明治初めまで法燈を守っていたとみられるが、福田寺は肥後國誌採録の頃には寺伝はおろか「鎮守堂ノミの廢迹」となっている。郡史のいう「三十六坊十二門」また史蹟調査報告の報ずる「七堂伽藍あり七十二坊」という土俗の説、その当否を含め、個々の遺構の洗いなおしをはじめとして、全体像と捉えるには内寺集落をも含めたきめ細かい調査を他日に期すほかない。（緒方）